れば、なり。」サー・ジョン・ハーシェルの言に、「宇宙間の現象は、數多の否總ての科學の結合に依ることなくしては充分に說明し得べからざるものなりとのことは、科學研究者の時々刻々服膺すべき所にして、此事は如何に強く之を明言するも過きたりと云ふことなし」と。自然の最も重要なる秘密は、屢、意外の場所に潛匿するものなり。多くの貴重なる物質は、製造所の廢物中に發見せられたり。他人の廢棄したるものを調査せよとはグラウベルの名言なり。將來の幸福及其繁榮の科學に負ふ所の大なること英國の如きは、恐く他に其比なかるべし。英國の人口は、今現に三千五百萬に超過し、而して尙ほ迅速に增殖しつゝあり。今日にありても猶ほ我が英國の人口は、其國土の面積に比すれば頗る大なるに過ぐ。此を以て吾等英國人が其食物の爲に、一年に一億四千萬磅以上を外國に拂ふ

とは、統計表を學ばざるもゝの想像し能はざる所ならむ。勿論、吾等は重に我が國內に於て製造したる物品を以て之を購求するなり。現今我が國商業の不景氣、并に外國殊に亞米利加合衆國との競爭に就ては、世人の類りに喋々する所なり。惟ふに、米國との競爭は、以後數年の後ち同國の國債を償却し、仍て租稅を減少し得るの曉に至らば、愈、益、烈しきに至るべし。然れども、吾等をして未來百年の後を觀察せしめよ、是れ國民の歷史上より言へば、永き時と云ふべからず。其時に至れば、我が石炭の供給は大に減少すべく。又人口五十年毎に二倍したる割合を以て進まば、百年の後には一年四十億萬磅の食物を外國に仰がざるを得ざるに至るべし。然らば、何を以て之を塡充すべきか。通常論ずるが如く、三法の以て之に應ずるあるのみ。人口の增加を防遏する、即ち一法なり。而して、是

れ戰爭、饑饉、疫病等に因る者なり。艱苦、貧困、不足あるも之を顧みず、人口の繁殖を自然に任す、是れ第二法なり。科學的修練、及其應用の發達により、其增加したる人口を幸福安樂に生活せしむること、是れ第三法なり。吾等は實に科學を取らんか、將た艱苦を取らんか、二者其一を擇ばざるべからざるなり。吾等が其增加したる人口を安樂、豐富の狀態に於て支持し得べき希望を有し得るは、唯科學の賜を巧に利用するに因るのみ。而して、吾等若し科學の發達を妨碍することなくんば、科學は吾等の爲に此等の事を爲すや必せり。科學は實に、魔界の敎母たる能はず、然れども、科學は科學を愛するものを惠むこと深かるべし。

無數なる、又驚歎すべく且つ有益なる發見は、科學者の研究を待ちつゝあるは何人も疑はざる所なり。次世紀の科學讀本に記載すべき事項

は如何なるものなるべきか。次世紀に至らば、鋤犁を手にする童子と雖も、科學上の智識を有することゝ、現今哲學者の最も賢俊なるものに比して遙に勝るべし。ボイル嘗て其の論文を「自然物の利用に於ける人間の大なる無識、或は之を人生に使用する方法の充分に理會せられたるもの未だ曾て一物もあらざることに就て」と名けたり。是れ其當時に於て眞なりしのみならず、今日に至りても猶ほ眞なり。予は徒に現時に對し悲哀的の意見を懷くものにあらざるにを證せんが爲に、サー・ジョン・ハーシェルの言を引くべし。氏曰く、吾人が既に熟知する所の物質事物に就ても尙ほ重要無數なる使用法は、將來科學の進歩を待て發見せらるべく。今後、科學が更に吾人に知らしむる所の事物の使用法は、勿論將來に至りて發見せらるべきなり。此故に、吾等は將來人間の有形的財源の際

スゼニス、パークの愛國心に於て、將た、夫の愛を以て法則と爲し、吾等に敎ふるに害を蒙むることあるも之を惡まざるべきことを以てする所の基督の敎訓實例に於て、汝の退隱所を求めよ、之を發見するや必せり」と。

本章を畢るに臨み、予は牧師スアデーの嘗て、吾等が科學より受くる恩惠に就き、リヴァープール大學に於て爲したる演說の富贍なる記述(加之、科學の由て來る本源を考察する所の證言として一層其價値を增すべきもの)を引證すべし。氏曰く、「諸君が科學及器械の有効の結果によりて圍繞せらるゝ此商業的大都會に於て、諸君は能く知るならむ。科學の結果は啻に美麗と驚歎とを來せしのみにあらず、復た利益と權力とを來せしことを。科學は、吾等に知らしむるに無數の世界を包含する無限の

空間を以てするのみならず、無數の萬有が經過したる無限の時間を以てするのみならず、又從來見るべからざりし、而かも精緻にして光彩ある美容を有する無窮の有機體を以てするに止まらず、又大慈大悲の天使の如く、人間の爲に盡瘁するものなり。科學の務むるや、決して君主の權力を增さむが爲にあらず、又宮廷の壯麗を添へむが爲にあらずして、實に人間の幸福を增進し、人間の勞力を節減し、人間の苦痛を滅却せしめむが爲めなり。往時に於ては、熱鐵を混和せむが爲には、是が勞役者たる者炎々たる鎔爐の火邊にありて、殆と盲し殆と裸體となりて勞働せしが、現今、科學は空氣の器械的作用を以て之に更へたり。科學は、日光を利用して吾等の親愛する友人の容貌を寫して眞を得せしめたり。科學は憐むべき坑夫に示すに、動もすれば爆發の患ある石炭坑中に於て、安全

限なく增加し、從て吾人狀態の大に改良進步することを慥に豫期し得べきのみならず、又吾人の力は宇宙の秘藏を洞察し、宇宙最高の法則を知るに至ることを待つを得べし」と。

科學は、斯の如く有形上國民を益するのみならず、復た慥に個人幷に國民の品性を高尙にし、且つ强壯ならしむべし。往時、才智技藝の神が王パリスに與へし大なる賜は、今日自由に何人にも與へらる。何となれば、吾等は個人にも國民にも、左に掲ぐるテニソンの高尙なる詩句を應用するを得ればなり。

自尊、自知、自制、唯此三者のみ、生活をして最高の權力あるものたらしむ。
然れども、たゞ權力の爲めに生活すべきにあらず、唯法則に從ひて生活すべきのみ。權力は求めずして自ら來るべし。法則に從ひ行爲するとき

は、吾等毫も恐るゝ所なかるべし。

ジョン・クランシィー・アダムス將に大統領の椅子を去らむとするに際し、ボストンに於て爲したる最後の演說を終らむとするに臨み、言を爲して曰く、「生活の輝々たる希望の、時に、空なる且つ愚なる喜悅心を激勵することあり。此等の喜悅心を制馭して、沈着なる愉快に回復せしむるは科學なり。失望の爲に苦めらるゝに當りて、科學は能く之を慰藉し、平和安心を得せしむ。昔時の偉人傳等を見るや、吾人は今日の生活の遙かに昔日に勝るあるを感ずべし。然れども、社會の競爭場裡に於て危機の起ることあらむか、則ち親友と雖も諸子を捨てゝ顧みず、僧侶宣敎師の來りて諸子を見る者、知らざる爲して諸子を避くるが如き轗軻不遇の境に陷ることあらんか。諸子は、ラリアス及シピオの友誼に於て、シセロ、デモ

スピニス、パークの愛國心に於て、將た、夫の愛を以て法則と爲し、吾等に教ふるに害を蒙むることあるも之を惡まざるべきことを以てする所の基督の教訓實例に於て、汝の退隱所を求めよ、之を發見するや必せり」と。

本章を畢るに臨み、予は牧師スプラーの嘗て、吾等が科學より受くる恩惠に就き、リヴァープール大學に於て爲したる演說の富膽なる記述(加之、科學の由て來る本源を考察する所の證言として一層其價値を增すべきものを引證すべし。氏曰く、「諸君が科學及器械の有効の結果によりて團結せらるゝ此商業的大都會に於て、諸君は能く知るならむ。科學の結果は啻に美麗と驚歎とを來せしのみにあらず、復た利益と權力とを來せしことを。科學は、吾等に知らしむるに無數の世界を包含する無限の

空間を以てするのみならず、無數の萬有が經過したる無限の時間を以てするのみならず、又從來見るべからざりし、而かも精緻にして光彩ある美容を有する無窮の有機體を以てするに止まらず、又大慈大悲の天使の如く、人間の爲に盡瘁するものなり。科學の務むるや、決して君主の權力を增さむが爲にあらず、又宮廷の壯麗を添へむが爲にあらずして、實に人間の幸福を增進し、人間の勞力を節減し、人間の苦痛を滅却せしめむが爲めなり。往時に於ては、熱鐵を混和せむが爲には、是が勞役者たる者炎々たる鎔爐の火邊にありて、殆と盲し殆と裸體となりて勞働せしが、現今、科學は空氣の器械的作用を以て之に更へたり。科學は、日光を利用して吾等の親愛する友人の容貌を寫して眞を得せしめたり。科學は憐むべき坑夫に示すに、動もすれば爆發の患ある石炭坑中に於て、安全

に勞働するの方法を以てせり。科學は、醫師が眼球の周圍を裁斷するに當り、魔藥を用ひて患者に寸毫の苦惱を感せざらしめたり。科學は、幾十百年の間ともなく、痛ましき國民の膏血を絞りて打ち建られたる三角塔を造らむとせず。而して燈臺及び汽船を造り、又鐵道電信機を造る。科學は、盲人に視感を與へ、聾者に聽感を與へ、又能く生命を長くし危險を減少し、瘋癲を治し疾病を驅逐す。而して總て此等の理由によりて考ふれば、吾等の子孫は一人も、理性を鍛錬し、想像を豐富にし、精神を修養する所の科學を全く知らずして生長すべからざるは明なり。

第十章　教育

如何なる快樂と雖も、眞理の要地に立つことには比すべからず。

ベーコン

神聖なる哲學よ、哲學は痴漢の推測するが如く乾酒漿濃なる者にあらず。反て「アポロ」(音樂の神)の琵琶の如く人の心を樂ましむる者なり。又其甘きこと神酒の如く、而も粗暴なる泥醉を來す者にあらず。

シェークスピヤー

教育を人生の快樂中に包含せしむることは、或は妥當のことにあらざるが如く見るものあるべし。蓋し、教育は少年の嫌忌する所となり、又教育は學校を退くと共に止むべきものと假定すること、普通の狀態なればなり。然れども、是れ誤解なり。若し眞に教育をして其効を奏せしめ

んと欲せば、之をして子女に適合し、從て興味あるものならしめざるべからず。而して復た教育は生涯續かざるべからざるなり。

ジェレミー・テーロル曰く、「蒼天の美を觀るものは眼眸にあらず、音樂の洋々を聽き、或は愉快の報道を聞くものは雙耳にあらずして、感覺的及智力的理會の凡ての快樂を感ずる所の靈魂是なり。而して、靈魂益、高尚に益、卓絶なれば、其理會する所も亦益、廣大に益、愉快なり。今耕兒ありて貴重なる黄鵠の革を見、或は晴夜の星辰を眺め、世界の秩序の整然たるを觀、或は又宣教師の講演を聽くことありとするも、彼は彼自身に反省の働を爲すことなく、其目視する所を觀念することなきが故に、其樂む所や痴に其喜ぶ所や愚なり」と。

教育の緊要なるは此處に存するなり。予は教授と言はずして寧ろ教

育といふ。何となれば、精神を修養するは、記臆を強くするより遙に緊要なればなり。講學は目的にあらずして方法なり。ベーコン公曰く、「講學の爲に時間を費すことの過多に失する、却て之を怠慢と云ひ、修飾の爲に學問を用ふることの過多なる、之を虛飾と云ふ。而して、學問の規則によりて何事をも判斷せむとするは、學者の氣質なり。學問は自然を完うし、又經驗によりて完うせらるゝものなり。才子は學問を蔑視し、質朴者は之を感賞し、賢者は之を使用す」と。

假令、ミルの言ふが如く、「人間發達の初級に屬する今日に於ては、人々の行爲の間に混雜を來さゞる所の同情の圓滿完全なることを感ずることは能はざるも」、而も、教育は慥に此一致の同情を吾人に與ふるものなり。されば、吾等若し此精神を以て學ばずんば、凡て吾等の學び得たる所の學

識は、ゲーテの謂へるが如く、吾等の暗弱悲哀を救ふに益なかるべし。曰く、

嗚呼、予は今哲學、醫學、法學を學び、尚ほ神學をも修めたり。予は實に孜々汲々として勉學せり。而して、今や此の智識を有しつゝ、依然たる愚むべき痴漢なり。

吾等の學問は、ベーコン公の言の如く、「以て休息すべき臥床にあらず、以て獨り逍遙すべき寺院にあらず、以て他人を下瞰すべき高塔にあらず、以て他人に抵抗すべき城砦にあらず、又以て利潤若くは商品の爲にする工作場にあらず、實に造化の光榮を讃美し、人性を高尚にする爲めの武器たり倉庫たるべきものなり。

エピクテタスの名言に曰く、「汝若し家屋の屋根を高むることなきも、

人民の靈魂を高むることあらば、汝の國家に對する功勞最も大なりとす。何となれば、卑屈なる奴隷が大厦高樓に匍匐するよりは、高尚なる靈魂を有する人が矮屋に住することゝ、遙に優る所あればなり」と。

此に於てか知る、現今我が教育制度は、果して是等の大目的を達するに最も適すべきものなりや否やを考察することの最も緊要なることを。現今の我が教育制度は、果して學問其者よりは一層善良なる學問の愛を養成するに足る者なるか。我が少年が多くの歳月を捧ぐる所の古典學の講究は、功勞相償ふに足るものなるか。或は我が少年の學校を退くに臨み、バイロンの所謂、

去らば別れん。ホレースよ、予は甚だ爾を忌み嫌へり」。

に對し屢、同感を表せざるか。

或る一科目に心を專にすることの多きに過ぐるは大なる誤謬なり。幼時に於ては殊に然り。吾等若し自然に問はゞ、自然は眞正の法を指示すべし。假令誤ることなき能はざるにもせよ、吾等の天性は良好なる嚮導者なり。而して、小兒が興味を感せざる學科より利することは殆どあるなし。プリニー曰く、「榆杖は、吾等の學問をして成功せしむるものなり」と。又セオグニスの詩に於て、吾人は有益なる敎訓を得べし。曰く、

吾等は、常に善良なる事にのみ心を勞すべし、善良ならざるものには決して心を勞すべからずと。

或は思考するものあり。吾等の敎育制度は可及的に完良なり。而して、唯講究すべき要點は、學校及學生の數、授業料の問題、公私立學校の關係等あるのみと。シモンヅ氏は其著書の中に論じて曰く、「吾等若し唯敎育

を主張するのみならば、復た最善最良なる制度は如何と唯辯論するのみならば、是れ空論のみ。吾等は既に可及的に幸福なり、且つ出來べきだけ善良の方法を以て薫陶せらる。而して、此上に一層實際的の改良進歩を企圖せんと欲するも到底能はざるなりとのことを思考する人の尠からざるは疑なし。然れども、ゴルトン氏は、雅典の人民は全體より云ふときは、吾等英國人に優ることと恰も吾等が墺太利の蠻民に於けるが如しとの說を述べ、嘗て雅典に於ける社會上の狀態を論じたる人々も、多くは此說に同意を表せりと。

實に、此意見中に幾分の眞理を包含することは、苟くも希臘史を講究したるものゝ恐くは拒否し能はざる所なるべし。然らば如何にして然るか。予は我が敎育制度の、幾分か之が源因を爲すことゝ考へざるを得

ざるなり。

方法の如何によりては、手藝及科學の教授は必しも他の科目に於ける教授と扞格衝突するものにあらず。然るに、前にも科學の緊要及技藝教育の價値を論せしが、我が教育制度に於ては、上、高等の學校より下、初等の學校に至るまで、此二科を等閑に附し去り、獨り言語學の講究を主とするは不幸なる事實と言はざるべからず。

この歎ずべき議論は、決して今日に始りしにあらず。數百年前既に、アスカムの其著「學校教師」に於て之を慨歎するあり。又ミルトンは其のサミュール。パートリッブに與へたる書翰に於て、「吾等の子女は、不條理にも強て此等の文法上の細規則に執着せざるを得ざるなり」とのことを歎息し。又「假令、語學者は各國の言語を知了せりと誇ると雖も、言語文字と共

に事實を攻究せずむば、恰も農夫商人の、唯其鄉里の土著たるのみと同じく、社會に向てよりは寧ろ大學校に向て吾等を適當せしむ」と言へり。爾後數次の取調委員は同一の歎息を反覆せり。然らば、今吾等の地位は如何なるものなるや。

假令、改良は希望せらるゝが如く迅速ならずとするも、猶ほ吾等は著しき進歩を爲しつゝありとは、實に、予の斷えず耳にする所なり。然れども、果して然るや否や、予は之を杞憂せず。而して、予の恐るゝ所は、現今我が制度の實に精神を修練せざること、觀察力を修養せざること、又費す所の時間に對して正當に期望し得べき結果を與へざることにあり。

グラント・ダッフ氏嘗て說を爲して曰く、「子女十四歲に至れば、明瞭快活

に書籍を朗讀し得べく、正確滿足に文字を書し得べく、又算術の普通定則を知了するを得べく、又容易に、正確に佛語を話し佛文を綴り、佛國文學の初步に通じ、尋常の佛書若くは獨逸書の如きは、之を翻譯するを得べく、又幾分か天文學の思想を包含する所の地理學の初步を理會し得べく、(充分に其好奇心を喚起するほどに)又汎く地質學及歷史の事實を知り得べく、(充分に其棲息する世界の物理的幷に政治的の變遷を明に理會し得るほどに)又幼時より夙く既に動植物、巖石及自餘の自然物に對する彼れの觀察力を修練せられたること、又英國の文學中、當時の時世に適切に且つ緊要なる部分の大體に通曉したること、及書學音學の初步に達するを得べしとのことは、正當に期望し得べきことなり」と。

此目的を達せんとすれば、サー・トーマス・ブラウンの言へしが如く、「勤

勉を賴むこと豫言の如く、道理を尊むこと神の如くならざるべからず。」是れ決して不道理なる意見にあらず。然るに、吾等常に此意見を實行する能はざること何ぞそれ多きや。淺薄の學問は無益なりと云ふの故を以て、普通教育の輕視せらるゝこと少しとせず。然れども、淺學と、堅く學びたることゝの間には非常なる相違あり、吾等の主張する所は即ち堅く攻究するにありて、ロード・ブルーハムの所謂「二三の學科に於ては深く之を知り、凡ての學科に就ては淺く之を知るもの」是なり。

サー・ジョン・ハーシェル曰く、「如何なる自然の現象を問はず、凡て其事情に於て充分に且つ完全に之を攻究せんと欲せば、諸種の、恐くは總ての科學が一致合同して說明するにあらざれば能はず。是れ科學を學ぶものゝ最も切に注意すべき所なり」と。

我が公立學校及中學校に於て執る所の現行制度は、古典及算術の爲に自餘の諸科を犧牲にせり。勿論、古典算術は最も緊要なる科目なるに相違なし。さりとて、之が爲に科學及近古語學を排斥せざるべからざるの理なきなり。加之、我が少年子弟は遂に羅甸及び希臘語を話すに至らず、又古代歴史若くは文學に就き、全く興味を感ずるに至らずして中學校を辭するもの比々皆然り。されば、科學上の薫陶なくして教育せられたる少年子弟は、益々智識の一門を塞げられたることに向て苦情を鳴らすべき充分の理由あるなり。[illegible]

吾等は、單に一二の學科にのみ注意を專にすることの爲に、却て目的を誤り、興味を感ぜんことを希望する場合に於て、却て厭忌の感情を生ずることあり。[illegible]

教育に於ける吾等の大誤謬は、腦ふに、書籍崇拜に在るが如し。即ち教授と教育との混同なり。吾等は精神を修養することを務めずして、單に記憶力に關することを多きに過ぐ。小學校に於ける小兒は、習字の器械的作用及綴字の限りなき紛雜によりて倦み且つ厭かしめられ、又其心裏に少しも正確なる觀念を銘することなく、又日常の需要及職業に直接の關係を有せざる歴史上の年月若くは君主、及郡國の名稱の爲に苦めらる。而して、公立學校に於ても亦同樣の不幸なる結果は、羅甸及希臘文典の如き厭倦すべき學科の爲めに生ず。種々の滋養物を與へて其精神を修養し、且つ乾涸無味の事實を以て其精神を充さんよりは、寧ろ其趣味を修養せんが爲には、吾等の兒童をして此等と正反對の課程を追はしめざるべからず。多くの事を兒童に授くるよりは、學ばんとする慾念

を涵養することと大に緊要なり。兒童の知る所幾分か少ければとて、何程の事かあらん。一小兒、多くの智識を得て學校を辭したりとせんに、若し其學科を嫌惡するが如きことあるときは、忽ち其學びたる所を擧げて殆ど忘却するに至るべし。之に反して、若し小兒にして智識を渴望する習慣を得たる時は、假令其學校に於て學びたる所は少なしと雖も、學校を出でゝ後ち、二層多く自ら敎へ自ら識るに至るべし。抑、兒童は、天性智識を熱望するものにして、常に疑問を起すものなり。此天性は鼓舞すべきものなり。吾等は大なる範圍にまで彼等の天性に放任し得ることと慥なり。小兒は自ら敎育する所大なるものなり。然るに、智識を授くるに、多くは小兒をして困難疲倦せしむるが如き方法を用ひ、遂に總て智識を希望するの念を閉塞するのみならず、甚し

きは之を撲滅することと屢、なり。故に我が學校は講學を沮喪するの場所となり、終に吾等の希望する所の目的と全く反對の結果を生ずるなり。之を約言すれば、敎育は、小兒の視察し思考するの力を薫陶すべきなり。何となれば、斯の如くして、彼等の爲に其閑時に於ける最も高潔なる快樂の源を開き、人世の事業に於ける最も聰慧なる判斷力を得せしむるを以てなり。[illegible]

我が敎育制度に就き、予の敢て改正を要すべしと思考する他の點は、現行制度が、萬事を知らざるべからずとの感覺を與ふること、卽ち是なり。[illegible]

博士ブッシュビーは、學生をして已れを豪傑なりと思考せしめんとて、チャールス王の面前に出でたるとき猶ほ帽を戴けりとは世に傳へらるゝ

所なり。然れども、予は疑ふ、學生は輔の爲に欺かれしや否やを。而して博士の教育論に就ては予は頗る疑なき能はず。[illegible]一千二百五十二年にレースターの牧師たりしジョンは、雅典に漫遊の際、雅典の大僧正の娘ミンスタンチナより希臘語を學びたりしが、後年常に謂へらく、予の巴理大學に在るの日、誠實に且つ熱心に學びたる所よりは、雅典にありて二十歳の處女より學びたるところ却て遙に勝れりと。吾等は凡て斯の如く愉快に學ぶことを能はず。然れども、博士ブッシュビの方策に於て、予の見出す所の重なる失策は、其人間の無識なる大眞理を看過したるにあり。[illegible]兒童は教師を見て萬事を知る者なりとの感覺を懷くものなり。之に反して若し彼等をして、吾等の知る所は其知らざる所に比すれば誠に

僅少なりとの感覺を與へ、眞理の大海は猶ほ發見せられずして吾等の前に横はるとの思想を與へたらんには、必ず兒童の心裏に一大刺衝を與へ、人間の智力界を擴張し、其智識界を著大せんとの高尚なる希望を起すに至るもの多かるべし。[illegible]教育は、吾等の學校を辭するを其に止むべきものにあらず。而して、教育の法其始に於て宜しきを得ば、終身繼續して止まざるべし。[illegible]且つ又吾等の業務の何たるを問はず、特別なる興味を感ずる他の事項を定め置くは最も望ましきことなり。但し其事項の撰擇に至りては、各自其天性と嗜好とに問はざるを得ず。技藝に於て之を求むべきか、或は動植物を研究す可きか、或は又天體を研究す可きか、其何れか優れるやは予は敢て之を言はざるべし。吾等の選擇したる事項は如何なるもの

なるにもせよ、生涯の切愛を償ふに充分なるべし、否償ふて餘りあるべし、人生の愉快を以て充さるゝや疑なし、然れども亦、吾等は凡て豫め憂慮、艱苦、及憂愁の時あることを慮らざるべからず、而して、此等の不幸に遭遇するに當り、或る範圍に於て此等の不幸を忘れしめ、吾等を慰むるものあるは實に無量の幸福なり。[illegible]

ミル氏曰く、修養されたる精神を有する人即ち哲學者にあらざるも、智識の源泉を開かれ、其能力を鍛錬するの方法を教へられたる人は、其周邊の事物、即ち自然の物體、技藝の製作、詩歌の意匠歴史の出來事、古今人物の經歴、及將來に於ける彼等の豫望等に就きて、無盡なる興味の泉を發見すべし、固より此等の事物に對し無感覺なるを得べし、然れども、斯ては、此等の事物に於て道德上若くは仁慈的の興味を感ずることなく、

唯好奇心の滿足を求ひるもの、即ち修養せられたる心なき人に過て斯くあり得べきのみ。[illegible]

予は嚮に、我が工匠勞役者が將來讀書家となる時節は早晩到來するならんと述べたることに向て、冷笑を蒙むりたり。然れども、我が社會の事情は、大に改良せられ得べきものなりと考ふるも不道理にはあらざるべし。學校の擴張、書籍の廉價、無料圖書館の建設、是れ皆社會を文明に導き、高尚にする影響を有するものなり。予は信ず、此等は尚ほ貧窮及艱苦を減少することゝ大なるを。何となれば、貧窮艱苦は、一部は無識に、又一部は無教育者の生活に於て、興味快活の缺乏に基ゐするものなればなり。小學校に關しては、國庫の補助を與へて、而も器械的の教授を奬勵することなからんとするは、甚だ困難なるは疑を容れず。然れども、宗教上

若くは道德上の教育に關する問題、或は補助交附の制度を議論するは本書の許さゞる所なれば、敢て之を贅せず。[illegible]吾等若し兒童に講學の愛を與ふることを得ば、學問其物は自ら生ずべし。[illegible]

學果して然らば、吾等の少年子弟を教育するに當り、まさに務むべき事は、科學的發見をして活潑なる興味たらしむることと、我が歷史及國時を通じて至當の自負、正當の快樂の源たらしむることと是なり。之を約言すれば、若し吾等の學校にして、其名に背かざるものならしめば、若し其高尚なる職分を盡すに足るものならしめば、單に乾涸無味の攻究場たるより以上のものたらざるべからず。換言すれば、兒童の精神を鍛錬して、夫の貧賤貧富に論なく興味幸福の本源たらざるべからざる所の智力的天賜を感賞し、又之を享受するに適せしめざるべからざるなり。

教育は、少くとも吾等に教ふるに其飽に知る所のものは如何に少きか、其是れより知らざるべからざる所のものは如何に夥多なるかを以てするを得べく、又人生の厭倦すべきことを歎息する所のものは、卽ち智識は權力にして又快樂なりとのことを非難するものなることを知らしむるを得べし。實に、教育は吾等を導きてミルトンと共に講學の平和安寧なる空氣中に於て、眞理の煌々たる容貌を熟視せんことを試みしめ、又ベーコンと共に、如何なる快樂も、眞理の要地に立つことには比すべからずとのことを確めしむべきものなり。

後編

後編原序

若し一層善く書かれたらんには、更に善かりしものを。然れども既に書かれたるものは詮もなし。

これ予の告白を盡せるの言なり。後編を刊行せること恐くは予の不明に屬せん。前編は予をして後編添加の冒險を敢てせしめし程に屬く歡迎せられたり。

予は前編の序に於て、予が最も多くの慰安と愉樂とを享けたる思想命言、また他の益たらんことを望み置きたり。

予が此の情願は豫期以上に達せられたり。啻に二年未滿にして二十版を重ねたるのみならず、また慰と寄せられたる書翰の予が几案に堆きは感謝に堪へざる所なり。

前編批評の榮を賜へる人々によりて反復せられたる批判二あり。予の生涯の特に坦々として且つ圓滿なるが爲に、予は他人の爲に人生を談ずる能はずといふ、これ一なり。予も亦敢て此の事に當らんと期せず。

予は總て天の予に惠與せる所を忘却せず、又これに對する忘恩をたらざらんことを欲す。然れども、予にして惠まるゝことの大なるか、是れ特に予が本書の如き著作を爲すの資質たるにあらざるか。況んや予も亦予が中心の憂愁を有するに於て、世上の人と異なるなきをや。

書中引用拔萃多きに過ぎ、自說の乏た少きを難とする、これ批評の二なり。是れ實は予に取りて大なる讃辭なり。予は述べたり、作らざりしなり。

人々の明言せる如く。若し本書にして慰安の資たるを得て、能く人の失意を慰藉するに足るものあらんか、これ實に充分なる報酬にして、豫期したる予が希望の極なり。

千八百八十九年四月

ケント州ダウン

ハイエルムスに於て

パイロン

目次

第一章　功名心……一
第二章　富……一六
第三章　健康……二六
第四章　愛情……四七
第五章　美術……六七
第六章　詩歌……九〇
第七章　音樂……一〇七
第八章　自然の美……一三〇
第九章　生活の困苦……一六三
第十章　勞役と休息……一七七
第十一章　宗教……一九一
第十二章　進歩の希望……二一六
第十三章　人間の運命……二三六

第一章　功名心

好名の念は達士と雖も免れず。名譽は聰明なる精神を勵まして倫逸を賜しみ。勤勉に就かしむる所の搏車なり。

ミルトン

若し名譽を以て高尚なる心靈の最終の弱點せりとせば、功名心は則ち往々にして其最初の弱點なるべし。但し之を導く其方を得ば、功名心亦道德の勸奬に於て薄弱ならざる援助を與ふる者たるを得む。

シセロ曰く、世間若し哲人の敎誡及書籍の存するなく、余が少壯なる心に敎ふるに光榮と德義との人生最も愛すべく最も希ふべき者なる

所以を以てし、之に到達せむが爲には、肉體の苦惱は死地と雖も避くるに足らざる所以を以てすることなくむば、余は決して人間社會の救濟の爲に幾多の危難に遭遇し、極惡の人衆に應接せざるべし。而も今や此頭腦には書籍充ち、聖賢の聲充ち、古人の遺範充てり、曩には蒙昧の夜陰此頭腦を蔽ひ、今や學問の陽光此頭腦を照す」と。

詩人は吾人に語りて曰ふ、

萬人は失敗し一士は成功す。(テニスン)

而も是れ殆ど眞實にあらず、凡そ價値ある人は、其希望や多少必ず成功す。高潔なる失敗は卑汚なる勝利に優る。人若し喪心に陷らずむば、其被れる打擊は毫も損害と爲る者にあらず。この故に事の成敗は、之を企圖するに當りて逆しめ願るべき所にあらざるなり。

モーリス曰く、[illegible]予は熟知す、高尚なる失敗は卑汚なる成功を照らすことを。[illegible]

ベーコンも亦吾人に警告して曰く、「人若し透視靜觀せば、克く運命を見るを得む。蓋し運命は盲目なりと雖も、亦人の視察に入り難き者にあらざるなり」と。

成功の豫期を的確にせむと欲せば、成さむと欲する所を爲すを要す、而して好機は頻々として到らむ。就中時の利用は最も大切なり。ナポレオン・ボルムス曰く、「吾人の時を用ゐるは、唯勤勞を以て之を充たすの一法あるのみ」と。

「モンテベロの戰に、予はケルレルマンをして八百騎を將ゐて敵を攻

擊せしむ、彼は直に墺太利騎兵隊の眼前に匈牙利槍兵六千人を敵軍より分離せり、而して騎兵隊は別れて半里の距離に在り、其戰場に來援するには十五分を要す。而して余は知れり、全戰勝敗の決は毎に此十五分に繫りて存することを」と。是れ那翁戰爭の要訣にして、吾人が生活の戰爭に於ける、亦實に此に他ならざるなり。

吾人は復た他の點に於て意を用ゐるを要す、蓋し

競爭に當りて死傷なき名譽を得んと欲する者は、常に生命を賭して事に從ふの覺悟なかるべからず。(ビュルフ)

との言を服膺せざるべからざるなり。

且つ競爭の酣なるや、人は平時大なる苦惱を生すべき損傷にも、甚だ大なる効果を感知せざる者なり。

事物を計量するは宜しく愼重精到なるべし、力めて冒險の度を輕くすべし、損失を算勘するは宜しく的確にして遺漏なかるべし。而して一旦心を決するや、決して顧眄すべからず、斷じて勞働を吝むべからず、危難を怖るべからざるなり。

人苦し直進事物に當りて成敗を一睹に附するの勇なきか、是れ其運命を虞るの過大なるにあらざれば、則ち其勤勞の甚だ小なるなり。

ルナン曰く、「光榮は畢竟最も虛榮の嫌に遠ざかり得る所の者に他ならず」と。抑、光榮とは何ぞや。

マーカス・オーレリヤスは其行旅の一に關して說いて曰く、「蜘蛛は蠅を捕ふるに誇り、人は兎を捕ふるに誇り、或は網中の魚に於て、野猪に於て、熊に於て、竟に或は「サルマチア」人の捕獲に於て、世間に誇示す」と。凡そ

這敵は一方よりは虛榮に過ぎずと雖も、亦苟も其目的にして正當なるときは、人は皆成功し得ることを證明する者なりとす。

亞歷山は其所爲極端に奔れりと雖も、功名心普通の形式の標本と相すべき者なり。其目的は單に勝利にありて、之を子孫に傳へむが爲めならず。又之を統御せむが爲めにもあらざりき。其父フィリップが一城を陷れ一戰を獲たりとの報に接するや、之が爲に喜色あることなく、每に其侍臣に語りて、「父王の勝利の續き進むは、それ遂に予及汝等をして復た功を建つるの地なからしめむとするか」と言へりといふ。王は又森然たる星宿の羅列に對し、其一世界をも未だ盡く克服する能はざるを念うて、悵然として恨色ありしと傳ふ。此の如き功名心の遂に失望に了るは事理の當然なりとす。

哲人が功名心の虛榮を戒むるは、概ね亞歷山に於て見るが如き有害無益なる者に關するのみ。卽ち啻に他人の幸福を思はざるのみならず、亦其苦惱を顧みずして、偏に自個の地位を高めむとする者是なり。

ベルコン曰く、「高尙なる職掌ある人も、往々好運を求むるに急なるが爲に其日子を徒消することを大なりとす」と。他時又之を擴めて曰く、「己の好運は何人にも其生涯の目的とするの價値ある者にあらず」と。ギョエテが、「人は修養せむが爲に生活す、其成し得る所の者の爲に非ずして、乃ち其性の成され得る所の者の爲に生活す」と言へる亦宜なり。

名譽に關しては、名と實とを混せざるを要す。後世の記憶に遺存する、必ずしも名に限らず。芳聲の百世に傳はると共に醜名亦千載に流る。前者や後者や將た前後兩者の混淆せる者や、不幸にして一樣なる蹤迹

を留むるなり。アハブや將たジェゼベルや、ネローや將たコムモーダスやメッサリナや將たヘリオガバラスや、ジョン王や、將たリチャード三世や、彼等孰か復た其名の千載に傳はらむよりは、寧ろ速に堙滅に歸せむことを希はざる者ぞ。

「偉業の堙晦に附するは醜事の歴史に優る。清きカナーンの婦人の無名なるは汚れたるヘロヂアスの有名なるよりも幸なり。誰かバイレートよりも寧ろ優尚なる盜賊たらざりし。」（サー・トーマス・ブラウン）

王公や將相や、其傳や生に在らずして乃ち死に存し、成功に由らずして却りて不遇に由る。看よや、サーモピレーの英雄はゼルキセスにあらずしてレオニダスなるを。亞歴山の版圖は其死後直に瓦解に歸せり。那翁や、英雄を以て目すべきにあらずとするも亦猶ほ偉才の巨人たるを

失はず、而して其戰勝の効果竟に如何。其銃砲の烟の如く百戰の功は空しく消え、佛蘭西は貧弱痩削の狀態に陷れり。即ち其天才の効果にして後代に遺留すべきは、當日赫赫たる武功に非ずして、實に一部の「ナポレオン法典」なり。

名譽に對して最も確實なる又最も光榮なる權能を有するは、正義若くは獻身的の事業の爲に傳はる者是なり。レオニダスの獻身や、レギュラスの信仰や、是れ皆歴史の光榮なり。

時として、地名より命せられたる人名に在りて、其人は猶ほ世の記憶に存し、而して其地は夙く既に遺忘せらるゝことあり。バレストリナといひ、ベルジソーといひ、ネルソンといひ、ウェルリントンといひ、將たニットンといひダルウォンといふ、今や誰か復た都市を記する、吾人は唯這名

の人々を知るのみ。

ギョエテは其世紀の精神と呼ばれたる人なり。シェークスピヤ、ラトーや、世は唯蕪雜なる傳記を存するに過ぎざれども、吾人の彼等を知ることは則ち未だ熟す。

政事家及軍將は、其生時既に大なる聲價を享有す。新紙は其一言一動を記述す。而も哲人詩人の名譽は更に恒久の性質を有するなり。

ウォルヅウォルス、詩人の爲に(多少の例外あるも)紀念碑を哀求し、且つ曰く、政事家は之に異なりと。若し斯かる方法に由らざれば事蹟堙沒に歸するの虞ある者は、之を紀念する更に不可なしと雖も、詩人は實に其著作に於て永遠の生命を有する者に非ずや。

世界の戰勝者は實に軍將にあらずして乃ち思想家なり。成吉思汗、ア

クバール、ラダセス、又は亞歷山にあらずして、乃ち孔子、釋迦、アリストトル、プラトー及基督なり。吾人の祖先を統治せし帝王は、久しく既に暗昧に沒却せり。或は神聖なる詩聖の、之に生命を與ふる者なきが爲に、既に全く忘却せらるゝあり。或は高尚なる心靈の、之に伴ふが爲に、依然として傳へらるゝてせ、スコットオダテ及バイレートの如きあり。

凡そ這般の人物の生涯は、之を傳記體に縮寫すること難し。彼等は單に其生時に生活せしにあらず、彼等は古今の悠久に亘りて生存す。エリザベス時代と云はむか、人は直にシェークスピヤー、ベーコン、ラレイ、及スペンサーを想起せむ。國務大臣や樞密官や、凡そ顯要機密の職にありし傳輩は、記臆せらるゝ者幾ど罕なり。乃ちベーコンの如き、亦其法官として想起せらるゝこと少く、哲學者として記憶せらるゝこと多し。

加之軍將や政治家や、其名譽は畢竟何に基因するか、彼等の著名なる業及逸事を傳へたるに頼らずんばあらず。

アガメムノン以前にも數多の男者は生存せしならん、されど闇き長き夜陰は、無情にも詩聖の手より彼等一切を引き離して、之を暗昧に葬りしれり。（ホラチウス）

モントローズは幸にして兩者を併合せり、彼は其「我愛及唯一の戀」に於て約すらく、

予は予が筆を以て爾を著し、予が劍を以て爾を榮えしむべし。

凡そ世の最も偉大なる人物が、屢、最低の階級より起りて殆ど踰越し難き障礙に打勝ちたるは顯著なる事實にして、千載の下、人をして感奮

興起せしむるに足る。則ち其淫晦に屬する者は、寧ろ實に榮譽の源泉たるべき者なり。ホーマーの生地は何處なるか、其決し難き疑問に屬するは、却て其光榮を加ふる所以なり。此大詩聖を追求する者凡そ七市、（スミルナ、ロードス、コロフォーン、サラミス、キオス、アゴロス、雅典）

今唯學術の人を取らむ。レイは鍛工の子なり、ワットは大工の子なり、フランクリンは脂燭匠の子なり、ダルトンは織工の子なり、ブラウンホオフェルは玻璃工の子なり、ラプラースは農夫の子なり、リンニウスは貧しき牧師の子なり、ファラデイは鍛工の子なり、ラマルクは金貸の番頭の子なり、ステブンソンは石炭坑夫なりき、ホエートストーンは樂器工なりき、デヴィーは藥店の助手なりき、ガリレオ、ケプレル、スプレングル、キュヴィエ、及、サー・サ・ハルシェルの如き皆極貧人の子なりしなり。

且つ人間社會の大なる恩人が、多く名をだに記せられざるは實に悲むべし。火を得るの術は誰か之を發明せる。プロメテウスは唯明智の擬化のみ。誰か文字を發明せる。カドマスは空名に過ぎざるなり。

是等の發明は實に太古の雲霧に沒せる者なり。近代の進歩も雖も、其行歩甚だ緩徐にして、如何なる發明も殆ど之を一人に歸すべき者なく、且つ其主なる發明者の誰たるをだに知り難き者多し。コロムバスは亞米利加を發見せりと傳へらるゝ、洵に可なり、而も氏の到達せるやノルマン人は既に其地に居住せしなり。

吾等英國人は、我が國人に關して多くの誇揚すべき緣由を有す。暫く科學者及哲學者に就いて言ふに、ベーコンやホッブスや、ロックや、バークレイやヒュームや又ハミルトンや、是等の氏名は、毎に直に人間思想の進歩

を想起せしむる者。ニウトンノ重力說あり、アダムスミスの經濟學あり、ヤングの光の振動說あり、ハルシェルの海王星の發見及天體距離の研究あり、フルセスタ侯トレヴシック及ワットの蒸氣機關あり、ホエートストンの電信機あり、ジェンナートは天然痘を追攘し、シムソンは美學を實地に應用し、而してダルウヰンは近世の生物學を創成せり。

此等の巨人及其四儔は、吾人の歷史を作り、吾人の思想を陶冶せり。其一生は當時の社會に於て頗る顯はさる位地に在りと雖も、終に偉大なる勢力と爲り、今に於て乃ち克く榮光の紀念と爲るに至れる者なり。

第二章　富

富者も貧者も一處に會す、神は彼等一切の創造主なり。

ソロモンの俚諺

功名心は往々金錢を愛するの形に出づ。美術や音樂や、詩歌や將た科學や、之を試みざる者多々ありと雖も、世上最多の人衆は、生業の爲に何事をか爲さゝるべからず、これを以て收入の增加はそれ自體既に好ましき事なるのみならず、實に成功の愉快を與ふる者なり。

富は如何なる利便をも供し得るや、往々人の疑ふ所、俚諺に謂ふが如く、銀匙を口にして生るゝ兒童は果して能く幸なりや、余は之を信せず。富は力を役し心を勞するを要すること貧よりも大なるは疑ふべから

ず。而も種類の如何を問はず、凡そ收入を有するは、生活の快慰を增進する所以たるは確實なり。但し是れ固より人、財に主として財、人を奴とせざる際に限る者。富の所有の往々折耗を伴ふは疑を容れず。金錢と金錢を愛好することゝは屢、並行す。エマルソンの謂へる如く、貧人とは富まんと希ふ人なり、人漸く富むや、更に富を增さむと欲するの念切なり。飲みて益、渴を覺ゆることあるが如く、富の欲求は致富と共に增すこと多し。

此事、金錢の爲に金錢を求むる場合に於て更に甚だし。且つ金錢を得ることは之を保持し又之を利用するよりも易し。金錢の保持は、興會乏しく苦慮多き職業なり。損失の虞は猶は暗雲の如く、人の生涯を累はさむ。アビシウスは其相續せる財產を浪費せるの後猶は二十五萬クラウ

ン」の財ありしも、飢餓の迫り來らむことを懼れて自殺せずとはセネカの吾人に語る所なり。

富は決して無用を以て目すべきにあらず。金錢の價格は、一には其使用の方法を知ると否とに倚繫し、二には其獲得の方法如何に倚繫す。

「爾の朋友は言ふ、金錢を獲よ、吾等亦其惠に與らむと。若し予にして金錢を獲、猶は溫恭莊重の德を保つを得むか、願くは其法を指示せよ、予は金錢を獲るに躊躇せざるべし。然れども若し予にして、予が身に得たる善美なる者を棄てて余が身に添はず、又善美ならざる事物を取らむか、復た愚陋と謂ふべきのみ。金錢と忠信溫厚なる朋友と、孰れか吾人の擇に入るべき者ぞ。」

「凡べて這般の事態を了會せる人を妨げ、之をして羞恥露骨の狀態を

保ちて其の天命を樂むことを能はざらしむる者は何ぞや。餘余の食窮に安居するを欲するか。貧に居るの道を知る人の爲には、貧窮は如何なる境地なるかを知了せよ」（エピクテタス）

吾人はソロンがクロエサスに答へし言を記せざるべからず。「若し足下に優る鐵を有する人來らば、其人は直に此金一切の主と爲らむ。」

ミダスは他の事例を與ふ。彼は其觸るゝ者凡べて黃金に化せむことを願ひ、而して聽されたりき。乃ち其酒は金に化し、其食は金に化し、乃至其衣服其臥床亦黃金に化せり。

新奇なる事物は客惡を蓄して人心を襲擊し、富めるも貧しきも共に其魅力を喪失し、如何に誘るも効なきに了ちん。

世間黃金過多の爲に苦悶するもの、獨り彼一人にあらざるなり。

富は必ずしも利益にあらず、それをして然らしむると否とは一に其使用の法如何に關す。是れ唯り金錢のみならず、諸般の好機や特權や、其利益たると否と亦此に似たる者あり。智識や體力や、美貌や技能や、是れ皆害用せられ易き者にして、之を誤用するの弊はこれ無きに勝る。富を用ゐる方法を知らざる人の手に在るや、富は一の損害に外ならず。富は實に百般の事物を供給するの權能を有す、書籍や、美術上の製作や、旅行の時日及費用や、富は凡べて這般を供給するの權能を有す。

然りと雖も、富の効力を誇張するは容易なり。富や之を有し之を追求する誠に可なり、而も過大の犧牲を値する者にあらず。但諺吾人に告げて云ふ、金は往々高直に買はると。若し富は閒適を與ふるが爲に尊ぶべしとするか、閒適を犧牲にして富を追求するの愚は言を須たざらむ。且

つ金錢は實に人の精神を餒えしむ。されど世には危險を伴はざる恩賚あることなし、これも亦思はざるべからず。

金錢は人間に幾多の朋友を作る者なり、金錢は人間最大なる勢力なり、乃ち更に犬儒流の舌鋒を進めて、凡そ有力なる人は必ず富人なり、其權嗣明ならざる時に於て殊に然りと、ユウリピデスは曰へり。

ポスシェも亦吾人に語りて曰ふ、人實に富に對して毫末の欲念なしとするも、其所有若し單に其必要とする程度に止まらば、其世に處する猶ほ未だ驚揚の態を得ざるべく、其才華は實効の一半を減せむ。

シェレイは決して貪慾なる人にあらざりき、而して猶ほ曰ふ、「予は金錢を欲す、何となれば予は善く其用法を解すればなり。金錢は勤勞を命じ、閑暇を與ふ、而して、眞理を顯彰發揮せんとする者に閑暇を與ふるは、個

人が人間全般に對して贈り得る恩賞の最上なり」と。

ペピスが敬虔なる語を聞かば、人皆感を同じうすべし曰く「予は予が妻と共に始めて自家の車に乘れり、予が心悅び、神に感謝し、景福を蒙り、其家から動きなき」と。

斯の如きは、實に頗る自己的の滿足なりと謂ふべし。威尼斯に於ける聖「ギアコモデゥアルト」寺の刻文に曰く、「此寺塔の周邊に於ては、商人の通義をもして正實に、其神量をもして正確に、而して其盟約をもして忠實ならしめよ」と。（ラスキン）

若し商人にして此旨を心に體せば、彼は決して其職業を棄て若くは飽ずるを要せざるなり。

然りと雖も、若し單に金錢の爲に金錢を獲むことをもて、輕解一生を終る

が如きことあらむか、是等獲得の方法は、直に其享樂の妨障たらずむばあらず、貧窮の痛苦は骨髓に徹すべければ、「ミゼル」「貧窮」の名は實に此等の人に適す、彼等は眞個に憫然なる者なり。

「蓄財者曾てサルヴァトルの水彩畫、ブウサンの風景畫を得むが爲に全歐洲の畫舗を窺ふ。而も教祖の化身、最後の判決、聖ジェロームの會友等、凡そ這般秀美絶妙の繪畫は、ヴァチカン、ウッヒジ、又ルウヴル等の寺院の壁に懸ゆ、衍旅の人皆之を看るを得るなり。若し夫れ街頭に於ける自然の繪畫は、到る處之を看るべく、日毎及日出の風景には毎日之に接すべく、人體の完美なる彫像は、各人皆之を有すべきは復た言を費すを要せず。而も蓄財者の看る所は、彼に在りて此に在らざるなり。蓄財者又曾て、百五十「吉尼」を投じて、沙翁の自傳を倫敦の公羅市場に購ひ得たり、而も小

學生徒の「ハムレット」を讀むや、何等の意味なく、未だ闡發せられざる重要なる秘密の關鍵を開くことあらざるなり」(エマルソン)

則ち「目もて看るさいふの外、所有主の有する所は果して何ぞや」(ソロモン)

吾人は自ら思惟するよりも富めり。吾人は往々土地乞丐者の聲を聞く。衆人毎に大地主を艶羨し、大なる不動産を所有することは如何に樂しかるらむと想像す。されどエマルソンが謂ふ如く、「土地を有する者は殆ど毎に土地に有せらる」且つ更に好き意味に於て、吾人は各自數千町歩を有するに非ずや。道路共有地や、風光明媚なる海濱や、是れ實に皆吾人の有なり。加之、海岸は更に二大利便を有す。一には人の干渉を受くることと少く、二には自然の力を啓示して人を敎ふることと絶大なり。吾人若し善く之を知らむか、吾人は皆大なる地主なり。吾人の觸く所は土地に

あらずして、乃ち之を享樂する能力是なり。人[illegible]

且つや此絶大なる取得は、一毫の勞働を要せず、一件の處分をも要せざるの利便を有す。地主は難用の頑に堪へざるも、風景は單に之を觀るの眼を要するのみ。されば、キングスレイがエヴァースレイ附近の荒地を已れが多園と呼びしも、亦法律の見解よりせるに非ずして、萬衆の共に享受し得べき高尚なる意義に於てせるのみ。

第三章　健康

有漏有情なる人間の最も希ふべきは健康なり、之に次ぐ者は妻儀なり、之に次ぐ者は其道を以て得たる富なり、而して更に之に次ぐ者を交遊間に於ける少時の娯樂なりとす。

（ラシモニデス）

富の効驗如何に關しては世人或は意見を異にするも、健康に關しては衆說悉く一致す。

（ラシモニデスの言）

（ヘロドトス曰く）健康を伴はざる生活は重病なり、健康を伴へる生活は獻樂なり（愉說なり）。昔者、エムピレドは招澤を歡迎し、以て世人を疾疫より救ひ、乃ち權現

の尊稱を博得せり。市人は其名譽を表彰せむが爲に、此哲人がフェーブスの手を止むるの圖を打出せる貨幣を鑄造せりと傳ふ。醫士の職業は人想ふに、吾人は醫師に負ふ所幾何なるかを省ふる者少し。幸や醫方は自然にして且の朋輩となり、新奇なる又異常なる事極めて深なり。人の病むや直に醫士を迎ふ、醫士は處方を與へ、患者之を服し、診察料を拂ふ、然りと雖も下級人の間にありては、苦惱疾患多く神氣の弊より來る。此等の人に對しては、醫士醫師に非ずして、彼の法師や魔法師や、却て醫師たるなり。其功は此神氣の弊を除去するに在り。

多少進歩せる國に在りては、或は盤に咒文を記し之を洗うて其水を飲むあり。或は藥を服することを患者に在らずして醫師にあるあり。されど此等の事態は唯暫時の繼行を見るのみ、且つ一般習慣と相容れず。謝

儀の支拂に關しても種々の法あり。支那にては、人の醫師に支拂を爲すは自己の健全なる間に限り、一旦疾に罹るや直に之を停む。古代埃及にては、患者は初數日間醫師に支給し、爾餘患者平癒に至るの日子間、醫師は患者に支拂へりと云ふ。此等は頗る妙法と稱すべきも、或は果斷に過ぐる療法を誘致するの虞なしとせず。

之を要するに、我が現時の方法は、或は新なる發見及研究の爲に適切なる奬勵たる能はずとするも、實に醫療上最良の方法たるを失はず。パシタールや又ツンシナーや、シムシンや又リスタールや、吾人は如何に這般の人士の發見に負ふ所あるかは殆ど計度の外に在るもの、而も猶ほ衛生に關しては、吾人の自ら運營する所殆ど最優の醫學博士の爲し得る所に過ぐるあるを記せざるべからず。

世の人、健康の福祉を了會せざるにあらざるも、之が爲に些少なる煩勞を厭ふ者あり、或は之が保持に必要なる些の犧牲をも捧ぐるに吝なるもの尠しとせず。實に世間多數の人は、求めて其健康を害する所以の道を講じ以て其墳墓に急ぎ、以て苦惱多き晩年を迎ふるなり。

蓋し、世或は到底健康の希望なき體軀を享けて生るゝ者あるは疑を容れず。ポープは、長き病卽ち其生涯に關して說くこと至れり。人或はデカルトの論式に摸して、余は病苦に惱む、故に余は存在すと謂ふを得む。されど、這般は幸にも眞に例外のみ。吾人は殆ど皆健ならむと欲せば乃ち健なるを得る者なり。吾人の虛弱多病なるは、概ね自己の過なり。吾人は爲すべからざるを爲し、爲すべきを爲さず、而して其健康の衰廢を患ふるなり。

人皆疾患の已れに由るべきを知る、而も自ら健康を保つの術を實行する者罕なり、人の病むや、多くは自業自得のみ、古昔埃及人は厚葬を以て新生の目的となせりと云ふ、而して今猶ほ之を以て人生の大目的と爲す者多きを看ずや、[illegible]

吾人は醫師トヨンに似たり、健康は神怪の干渉を須ちて始めて至る者と爲す、而して日常些末の注意能く之を致すを知らざるなり、

生活の行途に上る者、果して善く衛生の切要を會得せりや否や頗る疑ふべき事に屬す、些細なる疾病に齷齪痛心せよと謂はず、病理學の書籍を讀むせよと謂はず、丸藥劑を以て己れの身體に實驗せよと謂ふにあらず、是れ固より望み得べきにあらざれども、吾人自ら疾患の身に在るを想ふごとに少く、輕微なる軀體の不安を感ずること少きに隨ひ、健康

の保持は大に容易を加ふるものなりとす、[illegible]

されど、衛生の大要を學ぶことは亦自ら別事に屬す、人の四十歲となるや、愚物に非ざれば則ち醫師なりとは、俚諺の云ふ所なり、而も不幸にして、世間四十の人に於て愚物と醫師とは相半す、

然らば如何、不健康は決して之より來る俾心の由實となる者はあらず、一の疾病ある人は他の疾病を免れたるを喜ぶべし、シヤ[illegible]ス[illegible]は常に事物の佳面を看ずして之を欲せし人なり、氏曾て病苦に責められしとき、書を一友に與へて曰く、予は今膀氣、喘息、及諸他の病に罹れり、されど、他は凡べて甚だ健康なり」と、偉人の病むや、憔悴と和氣とを以て病苦を堪ふる者多し、[illegible]

ふ存名なる觀相家カルバネルラは、常に其體の苦痛を感れて心氣を安

んするに慣熟し、遂に自若として刑架の苦に堪ふるに至りしといふ。蓋し人若し能く其注意を凝聚し、其意志を克制するの力を有せば、生活の小苦楚は殆ど彼を奈何ともすること能はざるべし。心に憂慮を懷くことあらむ、身に激痛を受くることあらむ、而も其精神は、克く清亮にして又克く爽然たるべし。苦痛や煩勞や、彼は終に之に克つ可し。

世人猶ほ往々にして無知と不注意とのために、避くるを得べき苦楚を受け、或は貴重なる生命を失ふに至る者あり。若し普通些末なる注意を加へむか、偉人亦多く其壽を延ばすを得しを疑はず。

今唯樂師を列擧せむに、ベルゴレンは三十六歳、シュウベルトは三十一歳、モザルトは三十五歳、ボルセルは三十七歳、メンデルスゾーンは三十八歳にして逝けり。是れ皆世界の悲むべき損失なりと謂ふべし。

希臘古代の神話に在りて、メレアゲルの生命は、一木杭と運命を相繫げり。其母アルテア安全に木杭を保存せる間は、メレアゲル亦不思議なる生命を保てり。今吾人の身體を注意せざること、或は此木杭の保存に及ばざるは、身體の殆ど人間萬福の基たるを想ふときは、頗る怪むべき事に屬すとすべし。

健康の保持に必要なる事項は、極めて平凡なるのみ、規則正しき習慣、日々の運動、清潔及飲食、其他萬事に於ける節制、此の如くにして人皆大概健康なるを得べし。

余は今茲に飲酒の弊害を道はず、唯世間猶ほ苦惱及氣鬱の多く過食に因するを解するもの少し。例へば世人の多く苦惱する胃病は、十中の九は自業自得にして、過食と運動缺乏との共合より起る。壽を長うせむ

と欲せば、食を短うせよ。とは、吉藏の教ふる所にあらずや。簡素なる生活と高尚なる思想とは人をして健全ならしむ。悲なき人には、其食量にして適度なるときは、食物の種類は要するに關する所大ならず。

ゴッドスミーン人に語りて曰く、余が享樂せる健康は、全く夙に「食物の一噛を三十五咀嚼せよ」とのみなる單語を聽きて之を屬行せるの賚なりと。

[illegible]の食物を味き、力めて愉悅を取り、以て食慾を熾ならしめよ。（ヘルリック）

飲食を過度にするなかれといふ規則は、理論上甚だ簡單なれども、實際は頗る容易ならず。藥劑一椀の爲に天賜の健康樽を棄つるのエゴイストは、世、往往其人に乏しからず。水を間に、飲食に節制ある人の、暴飲過食家よりも快樂を享受することの多きは、不條理に似て實は正確なり。世間流

き乾麵包の眞味を解せざる者多し。縱令又單に飲食より生ずる快樂を考ふるも、此理は尚ほ確なり。適宜の散策を試みたる後は、一椀の素飯蔬菜且つ王侯の珍羞に優る。飲食の快樂は美感の最劣等なる者と謂ふべし。如れ、是れ猶ほ人生快樂の隨一たるを失はず。日々三度必ず來り、心に關すること少うして身に關することの多きも、未だ以て輕重を爲すに足らず。

健全なる體慾といふ語あり、是れ實に身體の狀態の良好なる檢定法にして、時に又心の狀況をも徵するに足る者あり。所謂、

勞働の他、人に或る物を與ふる者なし

の語は、體慾に關するに於て殊に其適切なるを覺ゆ。親友と山川を跋渉せるの後に淡泊なる食膳に就く、豈人生の至樂にあらずや。

食時に當りて輕快優雅なる談笑を爲すは、啻に愉快なるのみならず、亦健康に益すること大なり。空腹は書良の鹽醬なりといふ、是れ至言なり、而も輕快なる談話の更に好きに若かざるべし。ロザリン嘗てピロンを謂へらく、

善諧好笑此の如き人と俱にせずして、余は未だ嘗て時の一時を談話に費したることあらず。

人誰か復た此類の交遊を希はざる者ぞ。プラトー、ゼノフォン、及プルタークの有名なる三大「宴會」に於て、其膳羞は全く記錄にすら上らざるにあらずや。古ラムベスの俚諺に謂ふ、

拙に相落なる人ありて、美酒を以て又輕快なる諧謔を以て其佳賓を饗するに、其妻なる人、若し一奉顧を洩らすことあらば、雅興は忽ち盡きん

とす。

鹽の食物に於けるは、猶ほ機才と善謔との談話及文章に於けるが如し。「コルンヒル」の輕快なる一記者曰く、「トマス・アチムビス若くは希伯來の豫言者より佳謔を聞かむと願ふ者なからむ」と。而もソロモンの確言は、人は泣くべき時あり亦笑ふべき時あることを敎ふるなり。

良好なる喜劇を讀むは、世界最良の友に伴ふなり。嘉言や善行や、皆此中に起る。滑稽を觀ることを禁ぜらるゝや、人の之を憤るは無理ならず。嬉笑は人の特權なるが如し。若し高等動物は發達せる推理力を有せずと論結するものあらば、確證を擧げて之を排すべきも、其能く滑稽を會するや否やは疑問ともならざるなり。

且つ頓才は、往々難題を決し紛爭を解けり。

輕朝は屢々優勝の翻弄を占む、殿廟なる談理の失敗する時に於て、解け難き結纏を解く者は唯り輕朝あるのみ。(フランシス)

ウルポール曰く、「無善無惡の些談を雜へたる端語は、國主にも相應しからざる者にあらずとされど、ジェームス二世が其僧正及樞密顧問を擇ぶに當りて、談諧の熟練を標準とせしとは、奇や如何にも信じ難き事に屬す。

チャムフォルト曰く、最も無益に費消せる一日とは、全く笑はずして過ぎたる日是なりと。

且つ嬉笑は全く自然なり、是れ嬉笑の尊き所以の一なり。人に嬉笑を強ふることは能くすべきか、人に其笑はざるべからざる所以の理を說くを得るか、人の笑ふや全く自個の中心よりせざるべからず、然らずむ

ば即ち全く笑はざるあるのみ。予若し笑ふべからずと考ふるときは、更に笑の禁ずべからざるものあらむ。且つ談諧は蔓延性なり。頓才ある人はプォールスタッフの如く言ふを得べし。然れども獨り頓才あるにあらず、復た實に他人の頓才の因由たり」と。

ドライデン曰く、「嬉笑は如何にすべき善事なるか。一條の藥能く人を攘らむが是れ幸福の機械と謂はざるべからず」と。予は更に之に加へて、之を健康の機械と謂はむとす。

或人予に告げて曰く、「喫烟を解せざるは人生快樂の一を遺却するなり」と。予は自ら喫烟せざるが故に是れ蓋し予の判すべき所にあらず。道般は各人の性情に由ることと多からむ。喫烟は神經質の人には大なる慰快なるべし。されど、煙は喫烟の巢じて毎に人生の快樂を增進する者なり

やを疑ふ。而して其味嗅二覺を鈍うするは更に疑ふべからず。

市街に生活する人は、戸外に在る時間の浪費にあらざるを斷言するを得べし。新鮮なる空氣は殆ど計量すべからざる大價値を有す。古來、舊家は都會に在らずして田舍に存す。プラトー、ホーマー、シェークスピヤーを以て兎、狐、禽鳥に代ふるの人は、大なる天惠を棄てゝとしつゝあるを警戒せざるべからず。

英人は大概闊濶なる野望を愛し、古美術を賞翫するよりも、打球、野球、蹴鞠等の競戲に耽るを常とす。遊戲の愛は殆ど英人氣質の特色とも稱すべし。ウォリヤム・ルーフヲスの古傳の如く、英人は皆「丈高き麋鹿を愛して、殆ど人をして彼等は鹿の父にあらざるやを疑はしむ。」

東來の旅客英國の球戲を觀、其多く富人なるを聞きて喫驚すること

往々なりといふ。彼等乃ち問ふ、「何爲れぞ、貧人を役して之を爲さしめざる」と。

ウォルヅウォルスは毎日戸外に散策するを例とし、常に曰く、「余は未だ曾て天氣に訴ふることなかりしが如く、復た未だ曾て醫師に訴ふるを要せず」と。凡そ戸内より望む窓外の雨色は、冥濛の觀を呈すること毎に實に過ぐ。冬日爐邊より戸外を望めば、四邊の風物轉、黯慘たるも、寒飈を衝いて雪裡を履むは、寧ろ一段の愉快を供す。一たび屋外に出でゝ地を踏み、新鮮なる空氣を呼吸するときは、生氣頓に加はる者なり。空氣中に生存すること、人は樹木と異るなし。

或は葱林の陰徑を辿り、或は河邊の清風に棹し、海の濶きを望み、山の嶮きを攀ぢ、

春空には禽鳥歌ひ、綠地には百花咲ふ

や、人皆ヘンリー四世を共に、余はボッシュヌヴァの如く、想ふと言ふを得ん。

羅馬の俚諺が、兒童は立ちながら學ぶ能はざる者を學ぶべからずと言へるは、勿論溢に失したるなりされど、若し少年の足を以て學び得る者は競技に限るものと思惟するあらば、是れ亦他の極端に趨る者と謂ふべし。

少年の競技を絕愛するは眞に健全なる本性にして、我國盛大なる學校に於ては、奬勵少しく度に過ぎるの感なきに非ずと雖も、野球、蹴鞠、端艇、水泳等の諸技は、年少子弟の最大なる愉快なるのみならず、亦絕好の樂餌と稱すべき者なり。

人は常に睡眠を得ることを難し、重要なる決定を要する時の如き、苦心無慮して、往々中宵猶ほ寢ぬることあり。凡そ健全なる睡眠を催すの効ある者、新鮮開豁の空氣に如くものなし。而して早旦の新生活に入るを得て、朝の香風徐に人を迎へんとす。（ダンテイ）

朝さしそめれば、猶遲き紅雀、草に飛びかひ、自然の兒等は皆朝曦と共に生命の泉の混混として湧出るが如く覺ゆ。

エピクテタスは、自個を以て身軀の絆纏ある精神とせり。余は謂ふ、是れ或は恩恩の言辭にあらざるかと。好し身體を以て脆き卑しき伴侶なりとするも、之を自愛するの務あるは疑ふべからず。世の美しき者を享け、天の麗かなるを樂むは眼を以てにあらずや、朋友の聲音を聞き、音樂の樂しきを知るは耳を以てにあらずや、手は最も精巧にして調法なる

機械と稱すべく、以て生活の必要を給し、足は柔順にして忠實なる老僕と稱すべく、以て生活の嶮艱を渡る。然らば則ち、人は最も周到なる注意を以て健康を保つを期すべきにあらずや。

而も顧て省思一番せよ、吾人の身體の如く巧緻複雜なる者は未だ曾てこれあらず。之を想ふ、殆ど人をして驚倒せしむるに足るものありて、

一千の絃皆善く永く其諧調を保つは、寧ろ最大不可思議の事に屬す

るなり。人若し一たび其身體構造の太甚しく複雜なるに想ひ到らば、誰か復た其生活の寧ろ一大不可思議とも謂ふべきに驚かざる者ぞ。其千百の機官は、皆些(いさゝか)の衝突なく協合諧和して其官能を竭し、日々年々整然として渝らず、時に人をして殆ど其身軀あるを覺知せざらしむるに至る。而も此體軀や實に三百個の骨を有し、其形狀各區々にして、其一毫

を變するも諸般の運動に少からざる障礙を生すべく、又實に五百個の筋肉を有し、無數の血管之を滋養し、無數の神經之を整制す。血管の一たる心臟は、一年三千萬回鼓動し、其一たび停止するや萬事休す。皮膚に於ても、亦驚くべき種々なる又複雜なる機官あり。例へは二百萬以上の汗腺ありて、體温を調へ、皮膚内外の交通を介す、其總長實に四里に到る。動脈、靜脈、毛細管、神經の長さ幾里、血中の血球と稱する各個小有機體の數幾何、想ひ來れば實に驚絶の他なし。若し夫れ感官を記せむか、眼の構造に在りて、水晶體、水樣液、硝子樣液の精巧、硬膜、脉絡膜の精緻、殊に網膜の構造の如き、紙より薄き者實に九層より成り、其内部は、光の振動に感ずる三百萬の錐體、及三千萬の柱體之を組成す。最も驚くべきを腦と爲す、マイネルトの計算に據れば、腦の回轉に於ける灰白質の細胞は、其數六

億に下らず、而して此等の細胞皆各、數千の可見大の分子を有し、是等更に又數千百萬の原子より成るなり。

斯の如く複雜なる吾人の身體も、理に準して注意を加ふるときは、善く其健康を保持して、苦痛なく、頗悶なく、多年の間善く作用し、而して老の漸く至るや、

樂師が掌を以て琴絃に觸るゝが如く、時ほ徐ろに其手を胸の心臓に置き、其振動を停止す。

第四章　愛情

愛情は宮廷を支配し、陣營を支配し、丘林を支配し、下なる人も上なる神人も擧りて之を支配す。何となれば、愛は天にして天は愛なればなり

スコット

愛情は人生の光明なり、日光なり。吾人は愛する所の人と共に俱にするにあらざれば、充分なる歡樂を享くることを難し、是れ人の本質然るなり。縱令獨棲の際に在るも、猶に愛する所と共に俱に享けむが爲に之を貯ふ。

愛情の開發は人の一生を通じ、年の進むに從ひ、境遇の移るに隨ひ、愛情は適應の化醇を爲し行くなり。卽ち幼時に在りては父母に向ひ、成年

に在りては妻に向ひ、高年に在りては兒孫に向ひ、又始終を貫いて兄弟姉妹及親族朋友に向ふ。友情の強さは殆ど寓言に類し、ダヴィッドとジョナサンとの例の如き、實に婦人を愛するの情に過ぐ。されど、余今之を說くを須ゐず、曾て朋友の章下に之が詳說を試みたればなり。

造化が人間に與ふる賚賜は、數、父母の兒輩に對するに喩へらる。母や優しき温なる顏を以て其小兒を熱愛し、或は接吻し、或は懷抱し、これを膝に上せ、又足に載す。擧動、容貌、歌謠、辨解より其感情意志を知得し、或は容を以て、或は言を以て之に應ず。其色慍れる時も、其笑顏作る時も、母の愛情は曾て渝らず。造化の吾人人間に對する亦實に此に似たり。高き大なる造化は、人間の必要を賜らすを以て其細心なる仕事を爲し、一切吾人の祈禱に耳を傾け、一切吾人の缺乏を補足す。其人間正當の權利と思はるゝ所の者を否む時と雖も、其否むや、人をして乞はしめんが爲

なるに非ざれば、則ち嗜欲物を否むの爲を爲すに過ぎざるなり。（フィリカシヤン）

宜なり、ウォーター・スコットの詩句に云く、

世間若し、全然情慾の渣滓を脫却せる人間の涙ありとせば、そは敬虔なる父が柔順なる女兒の頭に灑ぐの涙なるべし。

之を聞く、昔者、エパミノンダス其リウクトラの戰勝を喜ぶ理由の隨一は、其父と其母との喜色を見るを得るに在りと言へりと。

動物に對する愛情亦遺却すべきにあらず。野蠻人が動物にも亦靈魂の不滅あるべきを信じ、

死後皆同一天に生れて、忠實なる狗と主人と非に交友となる（ボーブ）

べきを信ずるは、吾人の同情を表せざる能はざる所。

摩訶跋羅多（印度の大叙事詩）に在りて、其主人公なるパンダヴァーヴァスの

終に天門に達するや、彼等は歡迎せられたれども、犬は之を入るゝを能はざりしかば、之を請ひしも許されず、乃ち其忠實なる朋を棄てむよりは寧ろ去らむとして、踵を旋らしゝかば、善靈竟に出で來りて、此犬の入ることを許しき。

人たるの樂さ人たるの苦さを、最も尊しとす有情の悲に過ぎざらん（ウォルス）

時の來らむは、吾人の望むべき所なり。

されど、余は今寧ろ唯婚姻の因となる所の愛情に就いて述べむとす。

斯かる愛情は實に人生の音樂なり、否、美には音樂あり、愛情には音なき諧調ありて、如何なる樂器も之に若く者なし。（ブラウン）

プラトーの「宴會篇（シンポジウム）」は、愛情に關して面白き談話を有す。アリストファネス曰

く、愛情は人をして其愛する所の人の爲に死を顧みざらしむ、斯かることは唯愛情に在りて之を見るのみ、男女を通して異ることなし。ペリアスの女アルケスチスは、之に就て希臘全般の紀念なり。其夫の父母敢て手を出すことなきを察し、此女は夫の爲に喜びて身を捨てたり。女の夫に對する愛情の濃なる、父母をして殆ど他人の如く見ゆるに至らしむ。神も人も之を見て尊き行となし、其德を頌美せむが爲に、女をして復たび地上に歸らしめたり。此異數なる優遇は、愛情の熱誠と德との報酬なり。

アガソンは更に快辯を揮うて曰く、愛情は人をして溫和ならしめ、麁暴を去り、以て斯かる燕宴に相會せしむ。祭祀にも、饗宴にも、舞踏にも、愛情は吾等の主なり。親和を進め、不和を排し、友情を溫め、恨を忘れ、善人は喜び、賢者は感嘆し、神佛も亦驚異す。少しく之を有する者は更に望み、大

に之を有する者は重んず。愛情は和暢、富華、欲望、思慕、柔和、婉娩の親にして、且つ善に與して不善に與することなし。勞働には嚮導者たり、希望には助成者たり、憂虞には救濟者たり。神と人との榮光なり、最良最英の主將なり。愛情は神と人との心を蕩かす優美なる歌曲を妙に奏し、萬人を惑して其行歩の跡を辿らしむ。」

疑もなく愛情に二類あり。「一はユラヌスの女にして、母なく、長にして賢なる神女なり。他はツオイス及デオーンの女にして、汎く知られ秀でたる所なき神女なり」されど、今詳に之を視るを要せず。ギネヴェルすらも、其生けるや善き戀を爲しを以て、其終を令くせり」と云ふ。

愛情の起原は、罪惡の起原と同じく哲人をして討究の思辨を費さしめたり。宴會篇を讀みもて行けば、プラトーの之に關して、アリストファネ

ースをして戲謔せしめたるを見む。ジョエットは、凡そアリストファネース。の眞趣を發揮せることと斯の如き者は、同氏の自作中に於ても稀に見る所なりと注せり。篇中アリスト、ファネース曰く、人性は本と現今の如き者にあらず。原人は圓狀なりき、其胴背や左右や皆圓形にして、四手四足あり、一頭にして二面相反の方に向ひ、圓狀の頸上に立ち、全く相酷肖す。此人は現今の人の如く直立歩行し、隨意に進退し、其疾走せむと欲するや、其八個の手足を以て輾轉回旋す。其力は偉大、其思索は博くして精、而して時に神と戰ふ。ホーマーの傳へたる、天を測り、神を捉へむと試みたるオオチス及エフィアルテスは、即ち此類の人なり。是に於て、天上の神議疑訝百出し、或は電光を以て之を擊殺慶滅すること、昔時の巨人の跡を滅せるが如くせむと主張する者あり。或は之を駁して、之を滅するの偶、供

犧奉祀を絶つ所以にして、神德の尊榮を併せて之を喪失する所以なりと論ずる者あり。或は這般の汚辱は、到底膺懲の大典を擧げざるべからずと赫怒する者あり。衆議紛紛の後、ツオイスは終に一策を案出せり。曰く、余は思ふ、余は彼等の無禮を懲らして風を移し俗を易ふるの方を得たりと。彼等をして依然其生存を繼續せしめよ。但余は彼等を兩體に斷離せむ。是れ三重の利便を生ずべし。彼等の力は半減し、而して吾等の供犧は三倍せむ。彼等は二足を以て直立歩行すべし。彼等若し無禮にして躁暴たらむか、余は更に彼等を兩截し、彼等をして隻脚を以て躍行せしめむとす。此に於て、ツオイスは細絲を以て熱卵を截るが如く人を兩斷し去れり。斯く割斷せられたる後、兩半各、相求めて終に相合せむとす。抑、兩人相求めて以て其本態を全うせむとするの情は、斯の如く古き者

なり。相別るゝや、人は符契の一半のみ、比目魚の如く唯形の一半を具する者にして、常に他半を求むる者なり。

今若し一半にして他半に逢着するあらむか、相愛相親の情は、殆ど彼等をして一切の他事を失却せしめむとす。彼等は秒時も相離るゝに落びざるなり。彼等は終生を共同に送らむと欲す、而も其互に何を欲するかを知ることを能はず。蓋し兩者相求むるの切なるは、決して戀人の交に於て存せずして、兩者の心靈の共に嚮ふ所、而も言ひ難き所に存するが如し。唯女性は髣髴の間に多少前感を有するに似たり。

是等の說の當否は暫く措き、人は直下に判斷を成すの本能的直覺あり、而して斯かる印象は變化すること罕にして、而も亦概ね正實なり。愛情の起るや、當面には頗る妄動に類するも、而も是れ殆ど神の默示と稱

ずべくして、從前存在せし關係を恢復するに他ならざるの感ある者なり。

君を君るは唯愛するため、愛するは唯君のみ。君を愛すること、こしへに。

經驗或は時に斯かる感情の僞なることを證示するも、其反言は幸にも立ち難し。最深の親愛は、往々徐徐に成長す。溫なる愛情は、多く誠實なる信頼の成果なり。

「戀の爲に婚して悔いざる者尠し」と、モンテイユの言へるは宜なるかな。ドクトル・ジョンソン亦常に言ふ、若し婚姻は常に大法官の調ふる所なりせば、更に幾層の幸福を增し、ならむと。されど、余は敢て此兩氏を以て良法官なるべしと謂はず。ランスローが薄命なるアストラの少女に言ひしが如く、「余は强ひられて戀はせじ、戀は唯人の中心より湧くべく

して、强制にてすべきものにあらず」

愛情の前には距離の遠近なく、四大の厚薄なし。セストスとアビドスとは大海を阻てしも、愛情は引ける其箭もて其間を接げり」（シモンヅ）

愛情は每に幸なるべし。バイロン嘆して曰く、

美しき心を我が君として沙漠にも住ひてしがな。世の盈さを打忘れ世をも恨みず人をも咎めず、心ばかりを君に盡して。

人又皆此感を同うせむか。

あはれ戀、愛欄生ひ、松茂る南の國、橘柚香しく薰香豐けき彼の國に在りて、君と予と月日は如何なりしぞ。

愛情の前には千里も咫尺なり、十年も一日なり。

平和なる時には、愛情は牧童の笛笛を調べ、戰の時には、武士の馬蹄に乘る。高樓酒を置くの夜は眺きばかりの裝を着け、閑村風清き日には綠草

[illegible]けき蒼野に舞ふ。愛情は宮廷を支配し、陣營を支配し、丘林を支配し、[illegible]
[illegible]なる神人も挙りて之を支配す。愛は天なり、天は愛なり。（ス[illegible]ト）

東方の或國に在りて、宗教及哲學が相結びて愛情を壓せむとせし時にすら、眞理は俚諺俗謠によりて之を復活す。土耳其の俚諺の「婦人は皆完美なり、殊に爾を戀ふる婦人は」といひへるが如き、其適例と謂ふべし。

佛國の一淑女曾て、婦人の一髮は二頭の牛よりも、更く力強し」といへる波蘭の俚諺をアデルカデルに語りしに、笑うて曰く、「必ずしも一髮と云はず、婦人は運命の如く強き者なり」と。[illegible]

されど、吾人は愛情を目して制縛の力と爲すよりも、寧ろ幸福の天使と爲さむと欲す。心心互に相信するを得るときは、眞個同一家の想を做

さしむる者は愛情なり。

愛情は、しのびやかなる同情なり、銀の鎖なり、瞬線の紐なり、胸と胸とを[illegible]、心と心とを結び、肉をも靈をも相接して一と爲すものなり。[illegible]

倍根が朋友について言へる語は、妻について更に當れるを着る。其樂を其友に分つ者なし、されど其樂は更に大なり、其悲を其友に分つ者なし、されど其悲は大に減ず。

我が愛する人我が側に來らむか、[illegible]

花や木や、綠地や、忽に異なる色を添ふ。恍たる言ひ難き妙趣はあらゆる者に加はるなり。（トレンナ）

善いかなブルイエルの言。曰く、[illegible]

愛する人と共に居れば我が願足る。[illegible]

ホトヽギスが運命について言へる語は、亦愛情に適用すべし。

其進歩は優し、其足は地を蹟まずして人の頭上を行けばなり。

愛情と道理とは各、人生の半面を領す、人は兩者をして各、其本趣を盡うせしめざるべからず。愛情を棄て、唯道理に依りては至德に達すること難く、又道理を擱き、單に愛情に賴りては至人と爲ること能はず。

メラニッピデス曰く、「愛情は人の心に希望の種子を蒔き、最も優しき者と最も美しき者とを共に宿す者なり」。

プラトーの宴會篇に於ける、「愛情は未だ曾て詩人の崇拜を受けず」とい參るフェイドラスの嘆は、今日復た之を發するを要せず。之に反して、愛情は詩人に與ふるに其極めて優美なる詩想を以てせり。就中崇高と優美との點に於て、ミルトンの天國の記述に勝る者は蓋し未だこれ有らず。

君と語りて吾は全く時の移るを忘れ、春去り秋の來れるを忘れ、總てのの樂しき事をすら忘れ果てぬ。且の風は心地快く、鳥は樂しげに梢に立ちさわぎ。草も木も、花も實も、快く日光に浴びて朝露の珠を散らす。驟雨一過の後には、野山の匂ひ得も言はれず。夕ざれば萬事足らひたる心地に野田の景色も面白く、靜けき夜としなれば、月清く星高し、かゝるおもしろの眺にも、かゝる心地快き國にも、君あらで何の樂しきかは、君あらで何の樂しきかは。

且つや、人は皆其理想的婚姻を遂げ得ざるを恨むを須ゐず。蓋し人は幸にも各其趣味を異にす、而して愛情は毎に愛情を作成し、卑しき者も、已がじし其値に隨うて、皆其好配を得べき者なり。シェークスピヤーは屢、言ふ、

女は我が者なり、海の水を蜜にし、其砂を珠にし、其塵を金にするも、わが

此富貴は得難き[illegible]

誠の愛情は不道理の者ならず、亦苛酷の者ならず。

君の開けき胸を出で、君の開けき心を出で、厳に起き越る海情の者と

なし給ひそ。誠や今は戰場に、富貴の敵を追ひ、君はしい前にも増して不[illegible]

誠心もて、弓執り持ちや又太刀を佩く。されば、かく變轉恒なきわが爲は、

君も諸とも賞け給はむ。君を愛する心は變られど、名譽を懸ふる我心は、

更に一段燃えつるを、や。(ラヴレース)

されど又、

人人の心を分ち去りて、愛情の熱を冷やすは些の原因にて事足るべ

し。世の浮沈も動かし得ず、悲しき憂き事は、唯親愛を增す便となりぬ

る心は、波高く風荒き時に覆らずして、日和麗らかに海靜なる折に破

るい船の如く、離れ去るなり。(ムウア)

世には、誠に愛情ばかり脆きものなし。些けき不和も、

細き絃琴の音管に出で來るが如く、稍〳〵其樂聲を亂して、終には全く音

の音を止むるに至らむ。(テニソン)

に似たるべし。愛情は微妙なり、不和と誤悲とは愛情を喰ひ盡す。若し愛

情にして、放恣を以て猶ほ續き得べくむば、粗雜無法に琴を弄するも其

音調に異變を生ずることなけむ。されば、

名も付け難く、心覺にも留らぬ程の些かなる愛情と親切との行爲

もて、此愛を保ち行くは、復た何等の樂事ぞや。

ポンヂ云ふ、爾の擇び出でゝ愛好しけむ淑女は

今爾の新人なり、天の恩賚なり、今や爾の手に任す。分別なき感情を以て

せずして、善く彼を敬へ、注意をば怠らぬこと其德をば信任せよ。其少き

や、歷練を加へ、保護者となり、指導となり、爾が經驗を以て安全に彼が師

苦なれ。順境に處し亦逆境に處するも、苦樂を共にして渝ることなかれ。道理の許さゞるならば寛假に過ぐるなかるべきも、さりとて威壓に失することあるべからず。一生を共に與にする人は、犧牲にあらず亦暴君たるべからず。されば往々新婚の幸福を傷る所の箴制なも覺えずして、妻は常に夫を戀人とするを得ん。

誠の愛情は、人を高尚にし尊貴にす。

一旦戀をして之を失ふも、一たびも戀せぬには優れり。(テニソン)

スティール曾てエリザベス、ベーステングス女を謂へらく、「此人を知るは卽ち自由的敎育を受くるに等し」と、婦人を頌する流麗の極と謂ふべし。凡そ婦人は皆其身の改善進捗を以て、唯自ら幸福の儲を增すのみならず、併せて其最も愛好する所の人をも高尚にし亦幸福にするを覺知すべきなり。

愛情や、眞誠なる愛情や、時日と共に增さり行く。既に婚せる夫妻は並び棲み、愛情と生活とが同意義となるまでも。(スウヰンバアーン)

生くべき者なり。且つ愛情は生命と共に終らず。母の愛情や限りなし。

愛情は死すと云ふは僞なり。爾他一切の情慾は飛び失す、一切は虛術なればなり。功名心は天國に生ひ立たず、貪慾は地獄の奪窟に存し難し。凡そ浮世の情慾は皆此地上に限り、其生ひ立てる處に枯る、されど愛情は滅すべからず。その神聖なる火焰は常住に燃え、天より來りて天に還る。此世にて往々にして薄遇せられ、欺騙せられ、迫害せられ、試驗せられ又繚燎せられ、而して後、天に上りて其完美なる安息を得るなり。苦辛無慮なる以て此處に播種せられ、而して愛情の秋收は實に彼處に存す。

既に上天せる母、微褓にして裏失せる嬰孩に逢ふや、その雪て費したる苦惱、憂悶、氣遠はしき晝、心苦しき夜、その無限なる悲、その無量なる涙の

報償として、奈何ぞ其れ歡喜の彩分を獲得せざるあらんや。（ザ・ゼ・ヲ）

夫妻、朋友、親子の愛情の重荷を負ひ來れる生涯に、其老境の歡樂亦大なり。或ば樂しき昔を語らひ、或ば未來の望を共す。人は其子に於て更に新生涯を繼續ずといふ、宜なるかな。

第五章　美術

高尚なる美術は、天然を變更し若くは改良して乃ち成る者にあらず。寧ろ何物にもあれ、愛好すべく又純粹なる物に對して偏く天然を討究することより來り、此等の物を愛好することに於て成る。力を竭し思を集して、此等の物に存する愛の自體を發揮顯揚し、美術の力を以て、和易なる緊調を以て、人の心目を此等愛すべき物に向はしむるあらんか、藝人の能事乃ち足る。

美を愛好すること若し啻も眞理の缺損を逐くの虞なからんか、美術の價値は藝人の表せる好美の心に正比例すべし。

最古の美術的製作の今日に遺存するは、粗笨なるも而も善く特質を

表彰せる、鹿角若くは鹿骨もて彫刻せる動物の像なり。而して這般太古の美術品は、往々にして、現今歐羅巴の溫暖なる地方に住する牡鹿、熊、馴鹿、北地に遁逃し纔に生を保てる「マンモス」(前世界に住みしといふ巨象)の如き大氷雪期以來の胎生獸の骨骸と共に、石器及粗造なる器具に混じて、英吉利、佛蘭西及日耳曼の洞窟より發見せらる。斯太古の時代に於ける人類祖先の風俗、習慣に關して、前記以外の消息を傳ふるに足る意匠工夫は、思ふに今後新に發明せらるゝを要すべきなり。

古物たるの點に於て此等の次に來る物は、アッシリヤ及埃及の高塔、殿堂、幷に宮殿に於ける彫刻物、及繪畫なり。此等の古物を美術的事業として觀察せむか、その缺點を有するや言を須たず。且つ古昔の遺聞口碑の頗る誇大に傳へらるゝは、是れ亦一考を要せずとせず。凡そ戰記に在り

ては、將軍每に兵卒より偉大なる人物として顯現せらるゝも、事實は決して每に然るにあらず。但古昔の戰爭に在りては、戰鬪は主として其大將の所業なり。此點に於ては、ホーマーの叙事詩とアッシリヤ及埃及の傳記物語とは相酷似す。そは暫く措き、古昔の戰爭に於ては、孰れか主將にして、孰れか褊裨なる、何れか勝者にして何れか敗者なる、將た又敵軍の逃竄都府の兵火等の如き、一瞥の下歷々之を指點し得べし。然るに、近者戰況繪の不塁にして戰話の明亮ならざる、未熟なる者の眼には、唯數刻の間火光の閃々たると硝煙の漠々たるとを看るあるのみ。

此等アッシリヤ及埃及に於ける彫刻物、及繪畫等は、縱令後世美術の優美鮮麗を有せずと雖も、沈重宏壯等の如き古代的特質を有するや疑を容れず。

美術は希臘に於て、一たび完全の域に達したりし以來、爾後數千年の今日に至るまで、未だ曾て之に及ぶ者あるを聞かず、亦未だ曾て美術を愛すること、當時の如きはあらざりき。聞く、デメトリアスのロードスを攻撃するや、プロトジェネス偶、「イアリサス」の繪を畫けり。プリニイ傳へて云ふ、「デメトリアス王は、此繪畫の兵火に失はれむことを虞れてロードスの掩撃を躊躇し、敢て都府を砲撃せざりき。蓋しデメトリアス王は、常に得べき戰勝よりは寧ろ繪畫の保存を欲したるなり。當時プロトジェネスは、敵の陣營に接近したる市外の莊園に其畫室を有し、其彩毫を揮ひつゝありしが、軍隊の喧囂は毫も其揮毫を妨ぐることなかりき。デメトリアス乃ちプロトジェネスを其面前に招致し、訊うて曰く、爾將た何の特む所ありてか、敵中にありて尚ほ且つ爾く大膽なると、プロトジェネス答

へて謂へらく、「王の戰を挑むはロードス人に在りて美術にあらざりしことを識ればなり」と。』

希臘の衰頽と共に美術亦沈淪せり。然れども、第十三世紀に至り、シマブ之を復興し、爾來其發達進歩は復た駸々の勢あるに至れり。

疑もなく、美術は人類の景福に在りて最も純粋にして高尚なる一因にして、目を以て心を練り、心を以て目を養ひ、其日光の百花に彩るが如く人生の色彩と爲る。ラスキン言ふ、「眞の美術に於ては、手と頭と心との三者一致の作用を成す。而も美術は製作し得べき者にあらず、一旦にして暫且に學び得べき者にあらず、亦已むを得ずして修むべきものにあらず」と。

學習と勤勞との結果なる美術の大作を鬼功に歸するは、獨り東洋の

みにあらざるなり。

學習と勤勞とは、萬人をして美術家たらしむる能はず、而も何人を問はず、學習と勤勞とを須ゐずして美術家たる能はざるなり。美術に於ては、二と二とを以て四を成さず、亦小を積むも以て大を成すことなし。

總て美術の目的は娯樂にありとは、碩學の言なり。然れども、斯は甚だ不完全なる定義なり。若し此說に從はゞ、圖書館の設備亦唯娯樂と裝飾との爲なりと言ひ得べきなり。美術は自然に賦與するに人的性質を以てす、人的性質は往々自然の有せざる所なり。プラトー曰く、「爾若し自然にはりて造られたる人を拉し來り、之を他の美術の成果たる人に比するあらば、每に造化の美の美術に若かざるを見るべし、蓋し美術は自然よりも巧緻なればなり」と。ベーコンも亦其著「學問の進歩」に於て、「人の精

神は、物の本性に比して遙に偉大なり、勝りて純良なり、將た亦變化自在なり。是れ物界の心界に劣る所以なり」と言へり。プロメセアス嘗て女神ミネルヴァの美なる彫像を刻みたりしに、女神大に歡び、靈を天より呼び降して其彫像に憑らしめ、以てそを完全ならしめむかと宣示せりき。是に於て、プロメセアスは恭しく女神と俱に天に伴はれむことを請ふ、蓋し其資料を天に仰がむが爲なり。女神之を許す。プロメセアス乃ち、天上一切物皆活火の烈烈たる者あるを目睹し、其一閃を拿來して、以て其製作に活動を與へたりとは、詩人の吾人に傳ふる所たり。

摸擬は、美術の手段にして其目的にあらず。ジューキシス及パラシアスの傳說は其適例なり。或は鳥を瞞き、或は人の目を瞞する、之を美術の高尙なる本領に照すときは、唯一瑣事に過ぎざるのみ。ドクトル・ヤング曰

く、イリヤッドは摸倣すべきもホーマーは摸倣すべからずと。自然を學ぶに於ける美術家の進歩は、卽ち「美術の眞實完全なる理想に接近する所以なり」とは、サー・ジョシュアー・レーノルヅの謂ふ所なり。美術は、且つ摸擬し且つ創作せざるべからず。宜なるかなヴィクトル・クゥザンの言や、「現實なき理想は生命を缺く、而も理想なき現實は純美に乏し。兩者共に融合するを要し、俱に手を握るべく、又同盟を結ぶべし。此方法により始めて最善最美なる製作は出づべきなり。されば、美は絶對的理想にして、決して單に不完全なる自然の摸擬に止まらざるなり」と。

繪畫の蒐集は甚だ緊要なり。サー・ジョシュアー・レーノルヅ嘗て繪畫に於ける像形が、如何に多く其環象の爲に影響せらるゝかを彰示せる一個の適例を擧ぐ。ティントレットの「ジュピター」を畫かむとするや、先づミカ

エル・アンジェロの彫刻に繫る獅子に跨りたるサムソンの彫像を取り、其彫像には右手に驢馬の顎骨に代へて雷霆と電光とを執らしめ、其下に猛鷲を配し、以て之をジュピターに化成せり。第二の例は殊に著るし。ティティアンがカドーアの戰爭を畫き、大將の落馬を彰はさむとするや、禮拜堂システィーンの穹窿に畫かれたる靈神の畫像を摸したりといふ。暗中より光明を放つ靈神の畫像は、優に砲烟の裡落馬の軍將を活現せしむるの好扮本たらむとす。

眼目の領域内に在りて、美術家の目的は、實に人の目を誘引するに在りて、決して之を欺瞞するに在らざるなり。其更に高尚なる本領は、目に關するよりは心に關すべきこと是なり。

疑もなく、

鍍金に鮫すること、百合の花を彩ること、菫草に芬香を振りかくること、氷を琢きて滑にすること、虹彩に潤色すること、將た又燭光を以て日光を照らさんとすることは、其徒勞笑ふべし。（シエークスピヤー）

然れども、物皆燦爛たる黄金にあらず、百卉必ずしも百合の如く艶麗ならず。是に於てか、之を顯現するの外更に之を選擇するの必要あり。

クウザン曰く、眞、善、美は無極の形象たるに過ぎず。然らば則ち、吾人の眞理、美麗、善良を愛するは眞に何を愛すと爲すべきか。吾人は無極の自體を愛す。無極の物を愛するは、其形象の愛之を蔽ふ。眞、善、美に於て、人を愛着せしむる者は無極なり。無極の表象たる眞、善、美未だ必しも人心を飽かしむるに足らず。如何なる大作も、以て美術家を滿足せしむるに足らず。彼は尚ほ一層高尚なる者を希求す。人或は山水畫を取りて、その描

寫の眞ならざるを非難せむ。而も吾人は反問すべし、所謂眞景とは何ぞや。若し其物にして景色が與ふると同樣なる印象を與ふべしとせば、卽ち人の其記臆より山容嵐態を想起する其印象を以て眞景に比せむか、山は更に高峻に、谷は更に窈窕なるを看む。是故に、文字上精密なる描寫は、自然の自體と同樣なる印象を傳ふること能はずして、寧ろ眞景と遠ざかるものなるを知るべし。

ゲーテ曰く、美術は、唯其自然にあらざるの故を以て美術と呼ばるべきなりと。美しき風景を擇び、而して綿密に之を摸寫すること、未だ以て美術家たるの本色と爲すに足らず。美術家は唯一摸倣者たるべからざるなり。更に高尚にして且つ巧妙なる者を要するなり。彼は摸寫すると共に創作せざるべからず、又多少解釋者たらざるべからざるなり。如何

なる壯觀絶勝と雖も、唯之を摸寫するに止まるは、タルナルの忍ぶ能はざりし所、乃ち能く山を動かし、亦能く之を崩す。之を聞く、曾てギドーの美人畫の摸型を看むことを熱望せる一公子あり。ギドー乃ち其繪具工なる一肥大漢を呼び、之をして容態を作さしめ、やがて美しき「マヅダレン」を畫きたり。乃ち曰ふ、「伯爵閣下、苟くも美且つ純なる觀念にして心中に存せば、摸型の如何は敢て關する所にあらず」と。ギドー曾て、羅馬の「カプチンス」寺の爲に聖ミカエルを畫く。當時其希望に謂ふ「余は天人の羽翼を有せむことを欲す。乃ち以て天に上り、美なる精神の形象を目睹せむ。是れ則ち余が畫かむとする天人の摸型と爲るべき者。而も余は未だ上天を得ず、下界に在りて天界の者を摸せむとするも、終に空望に歸せざるを得ず。是故に、余は我が心に省み、我が想像力を以て構成せる美の

理想を省みるを要するなり」と。（ドライデン）

科學は、人力の及ぶ限り、露骨なるも而も眞確なる方法を以て、事物自然の實狀を再現せしめむことを企圖す。而も時の如何、景場の如何等は、敢て關する所に非ず。之を爲すや、科學素より幾多の制限に從はざるを得ず、全く顧慮するなき能はず、亦森嚴なる羈制なくむばあらず。之に反して、美術は或る特殊なる觀相の下に、本原事物の印象を傳へむことを努む。或る點に於て、美術は、未知の世界に就きあらゆる記述が能するよりは、一層明瞭にして且つ一層活躍たる觀念を傳へ得むか。文學に在りて、巖石は巖石たるを得む。而も繪畫に在りては、花崗石たるか、將た磐石たらざるべからず。漫然唯巖石たるべからざるなり。されば、美術家は久しき以前より解剖學研究の必要を認め、而して高等普通學校に在りて

は、當初より解剖學の博士存在したるにも拘はらず、植物學若くは地質學に關する智識の望ましく考へられたるは、眞に近年のことにして、今日に於てすら、此等智識の緊要、決して一般に認識せられたるにあらざるは、奇と謂ふべし。

繪畫、彫刻及建築の關係的價値に就き、記述せられたる者尠しとせず。是れ蓋し多少益する所あるべきも、今や暫く之を措くも妨なしとせむ。

建築は曾に深き快樂を與ふるのみならず、復た微妙幽玄なる一種の印象を人心に刻む。マダム・ド・スティールは、之を「無聲の音樂」と稱へ、而して寺院は「思想の結晶」に於ける華麗なる模型にして、其晶窓は彩色絢爛たる透明の障壁なり。

カラクシィ言へらく、詩人は其吟詠を以て書き、美術家は其製作を以て

語ると。後者は實に一の大なる特長を有す、何となれば、彫刻若くは繪畫に於ける一瞥は、能く冗長にして且つ詳密なる記述に比して、一層活躍たる觀念を傳ふべ、ければなり。美術は、又更に國語の殊別を超絶して、總ての文明國民皆之を了解し得るの特質を有す。

且夫れ、物質的見解より之を觀るも、美術は最も要用なり。近者、サー・フランシス・レートンの演說中に述べたる所を摘記せむに、技術の修得は、「國家の物質的繁榮の方面より考ふるに、日々夜々、其要用の度を高む。各國の間に於ける商工業上の競爭(或は殆ど生活上の競爭を意味すともいふべき激烈なる商工業上の競爭)は、殆ど既に製造物の實質、其堅實と脆弱との比價如何に存せずして、專ら技術的風趣、若くは意匠の優麗に向うて馳騁を試むるに至りたればなり。」

然れども、美術の人間に對して能し得る最も高尚なる業務は、直に崇ぶべき道心の聲となり、情緒の健全なる修練となるにあり。現今吾人の留心する所は審美的圓滿に在らずして、寧ろ此使命を完うするに存するのみ。(ハーデウィス)

科學と美術とは姉妹なり、或は寧ろ兄妹と呼ぶを的當とせむ。美術の使命は、頗る婦人の天職に似たるあらむ。人世の辛酸勞苦は、是れ其使命にあらず、美の暈光を以て人寰を包繞し、將た勤勞を快樂に轉ずることこそ其天職なるべけれ。

科學に於ては、吾人恒に進歩を期待す。而も美術に在りては爾く明瞭なるを得ず。さばれ、サー・ジョシュアー・レーノルヅは、確乎として、其美術上に於ける自信を躊躇なく言明せり。曰く、今後、繪畫は進歩改善して、現今

吾人の作成し得べき最も優勝の者も、殆ど兒戯の觀あるに至るべし」と。

然り而して、吾人はそを享樂する吾人の能力、亦同一の比率を以て增加し得むことを希望し得べし。ヴォルヅウォルス曰ふ、詩人は自家の製作の爲に趣味を創始するを要すと、美術家も亦多少之と趣を同うするものあり。

晩近、畫家の進歩、特に或る一面に著るし、吾人が彼等に負ふ所の一大幸福は、實に活動せる風景の享樂是なり。

余は勿論證據を有して爾く言ふにあらず。而もタルナル以前にありては、大家名畫の手に成れるものと雖も、風景畫は遙に形象畫に劣りたるものゝ如し。サー・ジョシュアー・レーノルヅの語る所に據れば、畫伯ゲーンスボローの風色を描かむとする、先づ碎石、乾草、及玻璃片等を以て、嚴

石、樹木、及水流等に擬し、畫卓上に結構安排して、以て一種風景畫の模型を構造せりといふ。サー・ジョシュアーは之に愼重なる論評を下して曰ふ、「風色の景相を目前に彷彿たらしむるに於て、此作業の効果は如何に大なりけむ、畫伯の工夫亦至れるかな」と、而も彼は之を稱揚せず、其弊の反て其利に勝ること多きを認めたるものゝ如し。

カンニンガムの言に據れば、ウォルソンはゲーンズボローと共に、風景畫描寫の基礎を構成せる畫伯なり。その描きたるセイックス及アルショオンの畫圖に於て、其城寨は麥酒壜を模し、其巖石は乾酪を扮したるものなりといふ。或は云ふ、此等の畫圖は、賣りて以て一壜の黑麥酒、一塊の乾酪に換へられたりと。蓋し、當時風景畫を尊重する觀念の、猶ほ未だ認められるゝに及ばざりしは亦以て見るべし。輓近に至るまで、山水の風景

に對する一般の感想は、タシタスの說述に同しかりき。「我か故國たるにあらずむば、誰か復た亞細亞亞弗利加若くは伊太利を後にして、風致なき陰鬱なる日耳曼に往くものあらむや。」

ドクトル・ビーティーが、前世紀の終末に於て著述したる「眞理、詩歌、及音樂」の一節は、頗る興味ある說述なり。曰く、「蘇格蘭の高地は、概して陰鬱なる國土なり。鬱葱として榛莽繁り、霧深く、四邊小暗く陰氣なり。山丘綿亘し、急流奔蕩して斷崖響を爲し、其間處々狹溢なる谿谷は人烟稀少に、崎嶇磽确なる土地は以て耕耘するに堪へず。陰悽なる氣候は以て牧畜の雅趣を容さず。江灣湖海に於ける狂濤は、洶湧として怒號し、旋風時に巖石に激し、時に洞窟を襲ひ、泣くが如く、怒るが如く、亦悲むが如く、月光乃ち此風色を照して幽暗悽愴たり。此等數者の物象は、蘇格蘭人思潮の

上に、憂鬱暗昧の調を撒布す」と。ゴールド・スミス尙ほ且つ、蘇國の高地を以て荒凉陰鬱の境と爲せり。ジョンソン常に曰ふ「蘇格蘭人の眼に映する風景は、英闘に到る樣道を以て最と爲す」と。然も是れボズウェルのジャイアントの樣道は、「一見を値す、而も必しも之を觀むが爲に往くを要せず」と。言へるに比して、其意義甚だ逕庭あるにあらざるなり。マダム・ド・スティール揚言すらく、賢哲を見むが爲には千里を遠しとせざるべきも、ネープル灣を賭むが爲には晶窓を開くてと猶ほ懶しへと。

昔者、鑑賞の缺乏は啻に風色に對してのみ然るにあらず。バルク尙ほ且つストーンヘンヂに於ける演說中に言へることあり。曰く、「ストーンヘンヂは品位の上より云ふも、亦裝飾の上より觀るも、賞賞すべきものの一もあるなし」と。

醜穢なる風物は、亦時に人間品性の上に有害なる効果を及ぼす者なり。世に傳ふ、ドンキホーテの放心は、實に武勇傳の熱中と、ラマンカの無味平板なる風物の致す所なりと、是れ夫れ或は然らむか。

風景の愛は、單に美術にのみ歸すべからず。吾人が四圍の美を感賞するの修練を得るに至れるは、幸に美術と科學との結合せるに賴る。

美術は吾人の觀察を翼く。而して、世には說話を能する者數百に對して、思惟の能力あるもの僅に一人を得べく、思惟の能力あるもの數千ありて、始て一人の觀察者を見るべきのみ。明瞭なる觀察は、詩歌、豫言及宗教に普通なる要素なり。凡べて美術の大成は、每に三個の素性より成ることを記憶すべし。先づ專心熱意を以て自然の事實を把持し、然る後、人間智能の力を以て之を整正し、以て凡べてそを看むものゝ爲に、最も有

益に最も美麗に、又最も記臆に便ならしむるにあり。夫れ偉大なる美術は、健全にして高尚なる生活の標本に外ならず。世間陋劣の徒は、身邊諸般の事物に應接する毎に觀察の明瞭を缺き、之を望むに正面よりすることなく、身を以て形の役と爲し、先見の明なく、理會の智なし。達識の士は之に反し、先づ詳に正面より其逢着する事物を觀察し、亦深淵なる識力を以て之を洞看し、然る後綽々として餘裕ある靈智と、從容として迫らざる精力とを以て之に應ず。是に於て、人間の智力及意志は、能く外界事物の善美を闡揚し、其害惡を抑制して、以て自覺ある聰明なる扶植者となる。」（ラスキン）

是に因りて之を觀れば、吾人は今後更に美術の進歩すべきこと、美の闡發せらるべきこと、將た今日吾人の能く感賞し得ざる所の快樂、若く

は微かに感知し得る快感の、將來後昆の爲に蓄積せらるべきことを希望し得べきにあらざるか。今日田舍の草屋に就いて看るに、圖畫や寫眞や、將た小像や、多少美術の班に列すべき者を備へざる者幾ど罕なり。是れ皆美術として今日に於て人間日常の生活に幸福を賦與する者、乃ち將來に於て尙ほ一層の効益を呈すべきは、思ふに當然なる希望なるべし。

第六章　詩歌

おのが藝術を謳歌する詩人は曰ふ「人の中心を動かすの歌詩は、既に一個の功業を以て目すべしと」。宜なるかな。

テニソン

プルターク傳へ云ふ、シラキウスに於ける雅典人の大敗績の際、シシリー人は、ユウリピデスの詩篇を暗誦する者を免せりと。

謂はく、ユウリピデスの爲に生命を援はれし者ありき、希臘の詩壇中、氏はシシリー人が最も崇むる詩神なりき。旅人其地に遊ぶときは、其詩篇の片句隻調を收拾して、相傳へて之を尊重す。斯くて、歸國せる雅典人は、往々此詩人の前に行き、其筆に感謝の辭を述ぶ、或は其主に氏の詩篇

の數句を敎へたるが爲に放免せられたりとて、或は戰後の漂浪流離の際その詩篇を謠ふて以て無量の慰安を得たりとて。

かゝる有樣にて、詩歌の德に賴り、生命を保全する者今はあらじ、されど、意味は少しく異なるも、同樣の功德は今猶ほ之あり。過勞、悲哀、憂慮等に疲れたる時、ホーマー、ホレース、シェークスピヤー、又はミルトンを援りて之を披讀し、陰雲は晴れ渡り、心の苦痛は休み、氣强く感し、身の疲憊を忘れ、生氣餘にして、闇を照らす曙光に達へらむ心地するは、人の屢、經驗する所なるべし。

ジョウェット曰く、「而も猶ほプラトーは、詩人を其共和國より排斥せり、詩人の、肉體を脫離せぬが爲に、詩人の、感情を激發するが爲に、斯くして、理想的の眞理より三段の隔離に在るが爲に。」

此點に就いても、プラトーの共和國を理想的の國家社會として認識する者少からん。サー・フィリップ・シドニーが言ひけん如く、「爾若し燦爛たる星河に似たる詩歌の天樂を有せずむば、余は世の詩人全體の味方として一言を爾に贈らむ、曰く、人の生けるや愛情の生活なり、而して歌よまざらむ人は、愛情を求め得ることなし、人の死するや、其紀念は忽ち世に沒せむ、詩歌なくむば墓誌銘もなかるべければなりと」

詩歌は、往々繪畫及彫刻に比較せらる。昔者シモニデスは、詩は有聲の畫にして、畫は無聲の詩なりといへり。

クウザン曰く、「詩歌は美術の第一なり、最も善く無窮を顯現する者は詩歌なればなり」と。又曰く、「美術は各個分立の看ありと雖も、就中、其各種の資用を併せて利益する者一あり。詩歌是なり。詩歌は、言詞を以て能く

描き能く彫り、建築家の如く建築し、又頗る音律と樂聲とを調和す。詩歌は、實に一切の美術統一の中心と目すべし。」

眞正なる詩歌は、正に繪畫展覽場に似たり。

繪畫と彫刻とは、人の未だ曾て見ざる者に就いて、詩文よりも遙に明晰なる觀念を與ふるは疑を容れず。されど、之に反して、一たび見たる者に就いては、詩人は他の美術及天然の幾と示し能はざる點をも人に啓示する者なり。物象は美術家善く之を示し、行動は詩人善く之を顯す。空間は美術の版圖にして、時間は詩歌の版圖なり。

今、摸型として、女性の美を取らむか。記述は勞して而も冷なり。大詩人は善く之を識る。是故に、スコット湖上の佳人を描くに當り、記述は一切之を捨て、唯其靚裝を記し、且つ謂ふ、

希臘の彫刻に於けるコムフもナイアッドも又グレースも、是れより美しき姿これより愛らしき顔は作りしことなし。

大詩人は神來なかるべからず、極めてよき美感を有せざるべからず、世上一般の人よりも深く高くして而も自制の下に在る感情を有せざるべからず。アーノルッ曰く、「詩に於けるミルトンは、其自作の壯大なる語句の云ふ如く、一切の言詞及智識を贈り、其靈机の神聖なる火と共に天使を送り、以て其讃美する所の唇に觸れて之を潔めしむる所の悠久なる精靈に對して、熱心なる祈誓の人たるなり」と。詩歌は、一面には人心不同の著るきを示すも、他の一面には、天才は身分若くは富と全く無關係なることを示す者なり。

吾は想ふ、眠ることなき靈魂とも稱すべき、高慢甚しき奇童チャッタートン。

ンを。山陰に來紐を執りて、光鳳舞月の襟懷をもて追遙せしバルンズを。（ウォルツウォルス）

一句を讀み出でざるも、歌人となるべし、惡詩を作る者は詩人にあらず。

平凡なる詩人の句は、神も人も納受せじ。（ポレース）

第二流の詩人は、一般に第二流の文士の如く漸く模糊の境地に埋沒す、されど、眞正なる詩人の著作は不朽なり。

詩歌は、自から留存するにあらざれば、又ウォルツウォルスの言ひけむ如く、「頭腦より出でゝ心肺に入る者」にあらざれば遺さむと欲して遺るものにあらず。ミルトンが、「喜ぶべく愛すべき事物を善く描寫しも失計なからんと要する者は、眞正の詩人たるを期せざるべからず」と言ひけ

む、宜なるかな。

「詩神の導を受けず、心靈の狂熱を有せず、卒爾として來り、美術の援助によりて殿堂に入らむと欲するも、其人、其詩歌、共に容れらるべきにあらず」。「ホーマーの詩篇は、一語一句の虧損あることなくして二千五百年間留存し來れるにあらずや。其間、實に無數の宮殿、寺堂、城郭、都市等は朽廢頽墮に屬せるなり。「サイラス、アレクサンダー、シイザー、其他此より後れたる世の王公大人の眞像も、之を得ること太だ難し、蓋し原圖は恒久に存し難く、複寫は生氣と眞實とを失ひ易ければなり。されど、人々の智慧及智識の映像は、書籍に存し、時厄を受けずして能く永久に耐持せられむとす。此等は又實に映像と稱すべき者にあらず、蓋し此等は能く後代の人心に其種子を蒔きて、以て新なる行動識見を長成すればなり。若し

船の發明を以て、遠隔なる地方間の交通を疏し、運輸貿易を便にする、尊ふべき効果を生せりとせば、文字は、更に重大なる發明なりと謂はざるべからず。文字は、實に年月の大海を渡りて、智識、感想及發明を運輸する者なればなり。(ベーコン)

詩人は多くの資性を要す。クウザン曰く、「斯詩の規畫を蹤迹せる者は、何ぞ、道理是なり。之に生命と嬌態とを賦與せる者は何ぞ、愛情是なり。而して道理及愛情を導ける者は何ぞ、意志是なり。」

人々は皆多少の想像力を有す、されど戀人と詩人とばかり綿密なる想像力を有するはなし。詩人の眼は麗しく輝きて、天より地に、地より天に陽視を凝らし、詩人の筆は想像力が知られぬ物の象を示すまゝに之を形に顯して、風の如く幻の如き者に、定れる在處と定れる名とを與ふ。

(シェークスピヤー)

詩歌は天才の成果なり、されど力を用ゐずして成る者にあらず、詩人中最も洒脫の稱あるムウアも、亦常に自ら緩徐持久なる勞働者なりといへり。

大詩人の作は、皆有史以來、人間天才の作成せる大詩篇の挿註と謂ふべきなり。

有名なる數學者貨で問ふて曰く、ミルトンの「失樂園」が證明せる所は何ぞや。今や猶ほ愉快の實用を問ふが如く、詩歌の實用如何の問を發する者あるべし。されど、眞正なる實利論者は決して此疑問を發せざらむ、最大多數の最大幸福は其哲學の規箴なればなり。

「愉快を以て其主なる目的とするも、其與ふる愉快の量を以て、天才の大作を輕視すべきにあらず。必ず之に要せる智能を考ふるを要す。

詩歌を充分に享樂せむと欲せば、人は局促を去りて、高尚理想に就かざるべからず。

實にや、常に詩歌を誦するときは、眞個に秀絕なる至善、之より出づる精力と歡樂との感は、人の心に現存して其讀む所を評價するに力ある者となるべし。（アーノルド）

シセロ曰く、然らば則ち斯人は果して余が敬愛欽慕と、辨難擁護とを要むるの權なしとするを得るか。吾人は世の最も學識ある偉人の教によりて、教育、格言、及實行は如何なる學科にも秀拔を成就すべきを知れり。然りと雖も詩人は天然の手が作れる所、心の力量に激せられ、神明の精靈に屬まさる。是故に、主又主なるが詩人に與ふるに神聖、プラトンは詩人を呼び、酒瓶神の子孫とし

て又通辭なりといへり)といふ形容詞を以てせる、允に當れり。詩人實は
に神々の殊寵によりて、此恩賚を辱うせる者なればなり。
シェレー曰く、「詩歌は不知不識の間に雜多なる思想に結合を與へて、以
て人心を覺醒し又擴張す。詩歌は、幔幕を啓きて世の隱れたる美を顯し、
日常卑近なる物象をも物珍かに見えしむ。詩歌は、そが顯現する者をば
凡べて再生し、仙境の光耀を衣被せる化現の人物は、爾來一たび之を感
想せる人の眼前に立ち、かゝる臆想に隨伴せる雜多の思想の傍に、優し
き又强き滿足の紀念として存するなり」と。又曰く、「凡そ高尚なる詩歌は、
無窮に應ずる者にして、一顆の榧實夙く既に鬱葱亭々たる樫樹を含め
るに似たり。幾層の幔幕を啓了するも、其含蓄する最愛の裸美は暴さる
ゝことなし。大なる詩歌は、斷えず睿智と歡喜とを湧かす所の泉なり」。

氏が「雲雀行(オード、トウ、スカイラーク)」に表言せる如く、
高く、高く、尚ほ高く、地上より火雲の如く霄は飛ぶ。碧霄遙に舞ひ上り、語
ひて翔り、翔りて舞ふ。
思想の光明に隱れたる詩人の如く、限なき雅頌を語ふ、世が心に懸けぬ
希望に、憂患に、同情を有するに至るまで。
露のたまりに於ける螢の如く、灯の如き其光りを散らしつゝ、眼より遠
る草花の裏に。

希臘にて、詩人(ポイチス)と云ふ語は造化の意味を有せり、英語に「バア
ド」(詩人)といふ語の源は疑はし。希伯來人は、詩人を「觀る人」と言ひき、蓋し
詩人は、唯他人より多く見るのみならず、亦他人を輔けてその觀難き者
を觀せしむればなり。希臘の古語「アオイドス」は、詩人又は歌唱者を意味
したり。

詩歌は世界の隠れたる美を聞き、日常近易の事物にも想像の光輝を添ふ。詩歌を愛好する人は、天然を楽むの優興を有す。天然は「目に於ける美觀耳に於ける雅楽なり。」

「されど、天然は詩歌に頼りて始て充分に其精采を顯揚す。偸じき河流も、菓實多き樹林も、馥郁たる花木も詩歌おらずむば人の愛好に於てそれ將た奈何。」（シドニイ詩歌頌）

烟雲漂々たる市廛の裏に在るも、詩人は能く吾人を徙して清風と日光とに浴せしめ、樹林の瑟々と流水の潺湲とに聽かしめ、白砂青水瀲灧の花紋に慰ましむ。魔術の如く、楽しき幻夢の如く、身世の擾々を脱離して無何有の鄉に遊ばしむ。

詩人は實に曾善く人性を知るのみならず、併せて天然を了知すること

と、大に尋常に軼ぐるあるを要す。

ダラッド・ロビンソン曰く、客あり曾てウォルヅウォルスの勤學を覽むことを乞ひしに、侍女は「主人の書齋は此處なれど、大方は野外にて勤學し給ふなりといへり。然らば則ち天然は實に詩人に向うて愛好を互換する者なりと云ふも、異とすべきにあらざるべし。

「虛事と謂ふ勿れ、詩人逝くときは、聲もなき天然は其禮拜者を失して、其葬儀を行ふといひけん、宜なり。（スコット）」

スウォンバルン曾てブレークを謂へらく、「蒼空や新樹や、青蕪や流水や、忠實なる不可思議なる愛好の心、實に之を清新にす。此心を説明して活躍せしむる者は、美術家の手と心とに於ける意識及目的是なり。春陽駘蕩、百花爛熳の時節に於ける萬物活動の光景は、未だ曾て詩人と畫伯を

の手に上るを得ず。新樹の葱々たる、禽鳥の飛翔する、夏雲奇峰多く清風宝欄に入るの景致は、亦未だ言辭と模型とに入らざる者なり」と。意義に於て多少趣を異にするあるも、余亦實に之を賛す。

詩歌を了得せむと欲せば、唯之を瞥見して已むべからず、或は卒爾としち之に接し、或は論議の爲に之を讀むことあるべからず。必ずや先づ其心を正うし、其氣を平にして、而して後之に對するを要す。人固より其心の煩悶憂苦の際に在りて、詩歌を以て之を醫するの方劑に充つる、亦不可なるにあらざれども、そは亦自ら別事なりとす。

詩歌の寶庫は其藏する所實に無量、而して萬人の來りて之を資るを待つ。最好の書籍は最廉なり。麥酒一壜、煙草一包の價を以て、シェークスピヤ、ミルトン等一年間大なる効益を以て讀むべき書籍を買ひ得るに

あらずや。

人生詩歌の效益を計らむとする必ず過去及現在に局すべからず。マッシウ・アーノルド曰く、「詩歌の將來は偉大なり、蓋し詩歌は實に崇高なる命運を有して、年所の進むと共に、次第に益堅確健全なる立脚地を人間に與へむとす。されど、詩歌は觀念のみ、理想のみ、之を外にしては、唯幻畫或は神靈の幻覺の世界あるのみ。詩歌は其感動を理想に寓す、理想は事實なるのみ。今日吾人の宗教の最強なる部分は、唯其無意識的詩歌是なり。吾人は詩歌を尊重せざるべからず。從來より一層の崇敬を加へざるべからず。吾人は從來世人の信せざるよりも更に高尚なる要用と、更に崇高なる命運とを以て之を目せざるべからず」と。凡そ這般を立說する、氏の如く適任なる者はあらざるべし。

詩歌を以て、「最も幸福なる最も善良なる心の最良至幸なる時態の記錄」といへる、宜あるかな。詩歌は人生の光明なり、「永遠の眞理に於て表言せる人生の映像」なり。世間最も美しく最も善き者は、一切之を不朽にも、「日常卑近なるが爲に人生の奥妙を蔽ふ障壁を破り」、「智識の中心となり又外圍となる」、而して詩人は、實に「未來が現在に投影する高大なる映像の鏡面」たるなり。

是故に詩歌は壽命を延ばす者なり、時を以て、分秒の連續にあらずして觀念の連續なりとせば、詩歌は人の爲に時間を作る者なり。「一切の智識の生氣なり、精神なり」、時間も空間も之を繫縛するをとなくして、詩歌は唯人の心中に生存す。人生は詩歌の實行なり、吾人は唯此高き讃美を詩歌に獻せむ。

第七章　音樂

音樂は道德法なり。音樂は物象に靈魂を與へ、心に羽翼を添へ、想像に、如なを生せしめ、悲哀には魔力を賦し、凡べての物に光華と活動とを與ふ。音樂は秩序の精髓なり、而して總て善良なる者、正しき者、美なる者に向ふて之を誘致す。蓋し音樂は、此等三者に於ける、目睹すべからずと雖も、而も猶ほ炫耀熾盛にして、且つ悠久なる形式其物なればなり。

（プラトー）

音樂は人間より古しと言ふを得べし、而して人類生存の當初より、音聲は實に音律の源なりき。然れども單に樂器の點より考ふるときは、聲器先づ起り、風器次で來り、絃器最後に起りたるものゝ如し。即ち最初に太鼓、次に笛、最後に琴是なり。されど音樂の若き歴史は、不幸にも湮滅し

て傳はらざる者多し。文字の使用は長く記號の發明に先き立ちき、而もかゝる事項に關しては、口碑の吾人に語る所甚だ少きなり。

「マーシヤス」と「アポロ」との鬪は、笛と琴との爭なりと釋く者あり。「マーシヤス」は笛を代表し、「アポロ」は琴の選手たり。戰は勿論後者の勝に歸せり。琴は音聲を發すること自由にして、音響を調ふること亦自在なり。

人の呼吸に基く音樂よりも、一層痛切に人の精神を感動するものは、唯り手の之を能するあるのみ。（モーリス）

音樂の起原を說明せんが爲め、古來種々の奇譚あり。希臘の傳說は傳ふ「ミューズ」の神の未だ降臨せざるや、蟋蟀は當時の世界に於ける人類なりき。然るに其降臨に及び、歡喜恍惚、彼等は食を忘れて歌ひ且つ謠ひ、終に餓死に至るも猶ほ且つ歌謠の愛好を拋たず。世上「ミューズ」の神を尊

崇する所の人々に關する報告を天に通ずるの職を取るに至れり。」

古き記傳の筆者吾人に語るらく、ピサゴラス、一日他の感官に於けると同じく、耳を導く所の一定の法規を求めむことを計圖しつゝあるに際し、偶、鍛工の店前を過ぎ、四個の鐵槌の響極めて諧和せるを聽き、乃ち之を衡りて、其重量、六八九及十二の割合なるを知りき。是に因り彼は長さ同じく亦太同じき四條の絃を掛け、各、上に記したると同一の比例に於ける錘重を緊結せり。而して此等絃聲の諧和せる、恰も翻に鐵槌の響の極めて佳き諧和を有せしが如きを發見す、是れ卽ち原音及第四音第五音第八音なり。」事の虛實は暫く措き、當初琴は唯四絃なりしものゝ如し。タ一バンダー自餘の三絃を附し、而して第八絃の加はりしは更に其後に在りといふ。

支那にあつては、語句若くは頭字を以て樂を表示す。最低音を「カン」即ち皇帝と名付け、爾他の諸音を支持する基礎なるが故に此名あり。第二音は「チヤン」即ち相臣、第三音は臣下、第四音は公事、第五音は龍艦と稱せらる。

（ヨーポットハム）音樂の歴史

希臘にても亦樂音各、其名を有したりき、不幸にして此等希臘、羅馬の古樂、更に降りて初期基督教時代の音樂すらも、今に於て一の標本の看るべきものを遺さず。所謂グレゴリオの音階なるもの、寡聞ダイゴリヤンの死後六百年を經て始めて作れるもの。セント・ポールの寺院は、グレゴリー神樂の一標本を有す。此神樂は、紀元七百八十年の頃シャルマニュの北方音樂を改良せむとするに際し、羅馬より聘し來れる樂匠の手に成れるものなり。神樂に於ける譜號は「ヘ音」を以て表示せらる、

今日吾人の用ゐる音階は此より漸次に發達せるもの、其初は唯一線の上に排列せしが、爾後次第に諸線を添ふ。此事項は興趣あるも、今は暫くこを措くべし。

英國人は甚だ善く音樂を解得するの人民なり。千百八十五年の當時にありてすら、セント・ダヴィッドの僧正ギラスダス・カムブレンシスの言ひけん如く、「ブリトン人は他國人民の如く同調銅音に歌はず、處の異なるに隨うて其音調を異にす。されば此國の常習として、恰人會合の開かるゝに當りては、集り來れる演奏者のあらゆる限り、種々の異なりたる樂調を聽くを得べきなり」。ウィリアム（ウィリアム）

廣く歌はれ且つ最も古きも知られたる樂曲は、夏目來てゐ英國の四人合唱の諸曲なり、こは少くとも千二百四十年代の作として傳へらる

人者にして、今尚は大英博物館に存す。

ヘンリー八世の時、ヴェニスの一公使は英國の寺院音樂に就いて言ふ、「群集は彼の皇歌所頭人指導の下に歌ひき。其聲や天籟の如く、其調や天使の歌ふに似たり、地上人寰の者とは想はれず」と。

ドクトル、バーニーは謂ふ、音樂に於けるパーセルは、劇作に於けるシェークスピヤー、叙事詩に於けるミルトン、形而上學に於けるロック、哲學及數學に於けるサー・アイザック・ニュートンと共に、英人の以て世界に誇るに足る所なりと。而もパーセルの音樂は、今や不幸にしてマックファーレンの言ひけむ如く、「吾人の大損失」として喪失に歸し、吾人に知らるゝ者鮮し。

パーセルは世を早くせり、而して美なる碑銘は彼の墓上に建てり、

嗚呼是れ故ヘンリー・パーセルの墓なり其靈は逝いて彼の天上の樂園

にあり。彼處に始めて、新人の妙調は其優者に達べるなるべし。

最も好愛すべき樂譜の作者は、頗る近時の人と雖も尚は往々不明に屬す。例へば彼の「吾が爲に飲め、唯爾の目を以て」の唱歌の如き、其語句はジョンソン之をフィロストラタスより取り、其樂譜は俗謠中の最も優美なるものとせらるれども、其作曲者は之を知らず。又「神、我王女を護れ」の曲の如き、之を採用するもの數國の多きに至るも、其作者の何人なるかは今猶ほ疑問に屬す。或はドクトル・ジョン・ブルを以て之に擬し、或は之をケーリーに歸す。但し其初めて歌はれしはコールンセルの客舍に在りしが如し。

「吁死よ、予を搖がして眠に就かしめよ」の樂曲幷に語句は、アンボーレンの作なりといひ、「コリドン傳奏」及「蜜蜂行」の作者は、牧謠詩人の鼻祖な

るヴィルディーなりと傳へらるる「ルーベル、ブリタニヤ」はアルシエの作る所にして、元と一千七百四十年ヴードンヘッドに近きクリーフデンに於て始めて演ぜられたる「アルフレッドの假面」てふ舞樂の一部なりき。蜂の蜜を吸ふ所は是れ吾が徜徉する所」の樂曲は、亦吾人がアルンに負ふ所ゼ・ヴァイオリ、オス、ブレー」は、元と「田舍の花園」として世に歌はれたる音曲なりき。來れ此黃砂に」と稱する樂曲は、吾人之をプセールに負ふ、又「嫩姫莫哀行」はステヴンスに「埴生の宿」は之をビショップに負ふ。

國樂には、往々奇しく憂鬱の調を有する者あり、是れ多く短音階の樂曲なり、而して是れ實に概して蠻族の音樂に於て亦常に見る所蠻族は殆ど戀愛の歌曲を有せざるものゝ如し。ヘロドタスの吾人に語る所によれば、其埃及に在るや唯一たび歌謠を聽きしのみ、而もそは悲哀聽くに堪へざるものなりきと。余の經驗亦之に同じ、憂愁に趨るの傾向は實に音樂の常なるが如し、されば、

異なる音樂を聽くだに、余は未だ嘗て悅しかりしことあらず、

との感を懷くものは、獨りジェシカのみならざるなり。

音樂の歷史は、諸の曲譜の作成に關する種々の珍らしき傳說を有す。ロシニイ語るらく、「ガザ・ラットラ」曲前奏の著作は、「ラ・スカラ」座主の爲に其高房に押籠められ、四人の舞臺掛りに監視せられて筆を執り、成るに隨うて其下稽古に供せむ爲め、原稿の片紙を窓より投げ出し、以て漸く最初の演奏を終へたるが如き事情の下に成りたるなりと。タールティニイ所作中の最も良作と稱せらるゝ「セコンド・トッリロ・デル・ディヴォヤ」は、夢の中に作られたりと傳へらる。ロシニイ又其「ダル・テッオ、スデラ・ドゥソ・ダリ

オ曲中の短ト調聯奏歌に就いて語りていふ、余の短ト調聯奏歌を書きけるとき、誤りて筆を藥瓶中に染めき。而して其書きたる文字の乾くを見るや、自然に現はれたる文字の形狀は、直に余をして短ト調を、長ト調に變換するの寧ろ適當なるを覺らしめき。若し此聯奏歌にして誦するに足るものありとせば、そは總て此偶然の出來事の効に歸せざるを得ずと。然れども此數者固より皆偶然の事たるは勿論なり。

嚴密に音樂の名に稱ふに足らざるも、而も深き快樂を與ふる一種の音樂あり。遊獵者には、如何なる音樂か能く獵犬の旬々に勝り得べき。白嘴鴉の啞々たる、固に音聲の無味無趣なる者に屬すと雖も、而も其喚起する連想は、猶ほ甚だ快適なるものあり。

されば、又眞の音樂とも稱すべき自然の音樂あり。衆鳥の喈々たる、河

流の潺々たる、漣漪の激灑たる、風浪の咆哮する、卽ち是れ。

天體は光を放射すると共に音樂を發奏すとは、亦舊時の印象なりき。

天體の音樂といふは、今人の、普く知る所なり。

宿の仰視する天體や、如何に小なるものと雖も、其回轉に於て天使のごとく歌はざるものなし。靜に童眼の天使に相唱和しつゝ。斯かる諧和は悠久なる靈魂に存す、而も壞敗を免かれざる汚穢の肉體を脫離するにあらずんば、吾人は之を聽くを得じ。（シェークスピヤー）

音樂は往々地上人寰の者にあらざるが如く、

音樂や月光や、將た感情や、融合一に歸する遠き世界の樂音。（スウヰンバーン）

なるに似たり。

歌謠に音樂あるが如く、說話にも亦音樂あり、啻に愛する人の音聲の

好すべきが爲のみならず、亦運想の嬌美に因るのみならず、說話の語言において亦實に諧和の存するあればなり。ミルトンの言ひけむ如く、

天使は語り終りき。而も猶ほアダムの耳に遺れる餘音は、彼をして暫時茫然として自失し、天使の猶は語りつゝあるが如く思はしめき。之を聽かんとて、彼は猶ほ凝立して身を動さゞりき。

歌謠に於ひて音聲に苦心するが如く、談話に於ける音聲に焦慮する者多からざるは奇と謂ふべし。蓋し

醜き論難、汚れたる辨解も、媚言好辭を以て潤飾せらるゝときは、惡德の表現を裝飾するものあればなり。

身に音樂を有せざるもの、好音美聲の坐作進退を翼くるあらざるものは、以て佞人たり、策士たり、將た大盜たるに遺せず。

とは、通規として異なるを得べし、然れども是れには著るしき異例なきにあらず。ドクトル・ジョンソンは音樂に於ける一の愛好を有せざりき。嘗て音樂の修練の甚だ困難なるを聞き、曰く、慷むらくは其全く不可能事にあらざりしをと。

人の當然期待する如く、詩人は最も優妙に歌謠の德を謳歌せり。衆多の詩人は甚だ相異りたる見地よりす。

ミルトンは侈美として之を宣揚す。

顧はくは煩悶憔慮に抗拒して、輕輭たるリディヤの和風に徜徉せん。リディヤの樂調や、整麗なる情思と輕妙なる巧技とを以て、或は嘻々、或は切々、幾多の婉約曲折を有する津呂き、一語直に人の肺肝に透徹する悠遠不朽の詩賦をの調會和合より成り、之を歌ふに、珠玉盤上に跳るの美音を

以てし、以て心靈の秘奥に潜める調和の琴線を挑發す。

時に或は誘惑として記述せらる。既にスペンサーのフィードリヤに就いて言ひけむ如く、

かくて枝上に暗々たる禽鳥よりも一層優しき彼女フィードリヤは、折に觸れ時に接して、侶を呼び類を集むべく、而して其巧技妙術を以て、彼等本土の音樂を流布せんことを(充分能く成し遂げけん如く)競ひき。

或は純粹なる幸福の原素として、

心靈と音聲との間には同感存す。かくて心地の動く所耳之に隨ひ、溶蕩の聲律、剛壯の格調、將た復た爽快若くは端嚴、其樂地の異るあるは心地の動靜如何に因る。吾人所聽の音律に符合する或る絃線の、吾人の内に存する琴線に觸着するや、心之に反應す。或は絶えざるにして聽きがてなる、或は高く朗かに耳を衝いて響き來る、颯風の吹き寄するごとき、總著く

總、高人、朝夕吾人の耳底に落ち來る山村の鐘聲は、如何に輕妙なる調なりしよ。(クウーパー)

人の心を感動するものとしては、

胸中に睡り居る樂魂の、妙手の魔術により覺醒挑撥せらるゝや、之に感觸する心(唯正しく觸着せよ)は未聞未聽の千音百調を唱酬す。

(ロージァース)

教化の具としては、

予の書籍及音樂を贈れり。而して總て是等の樂器は、高人逸士の據りて以て、搖籃より未來を喚起し、墳墓より過去を覺醒し、睡れども而も死せず、各自の悠久に收まれる思慮と歡喜との裏に現在を永續する所の者なり。(シェレー)

宗教に於ける補翼としては、

神聖なる神作鬼工の力により此世界の運動し始めしが如く、亦是天に

向うて大造物主の洪德を讃美謳歌せしが如く、恐ろしき世界終滅の秋に、塵土の美觀は漸く衰すべく、宣告の喇叭は天上に響き、死物は活くべく、生物は死すべく、而して音樂は調を亂して蒼空に鳴るべし。

（ドライデン）

或は復た、

聽け哀悼の歌のうたはるゝを、如何に微妙に聞ゆるよ。初めは萬籟靜なるに聽く晩鐘の、遠く湖上を渡り來りて寂なるが如く、聲漸く強うして、曲折多く老熟したる聲調を織り成し、終に古き寺院の屋上より響き來る終曲の聲は、四邊に反響して餘音嫋々たり。吁予は心、天界に醉へり、予の心靈は天に沖つ、蒼空を超えて、星辰を過ぎて。蒼よ、天使は予を導きて人間の樂境に在らしむ、而して洋々たる神歌は徐々たる輕風を充たす。いとやまからむ卑汚なる下界よ。予の靈魂は今や自由なり。

音樂の、人の感覺を支配する力量を說けるは、ドライデンの「歷山王の

饗宴」に若くはなからん。饗宴の盛式壯觀は、音樂の最も高尙なる觀相を暗昧に附せるも、かくばかり音樂の勢力を巧妙に顯せるもの少し。

詩人はまた無生無情の物の上に及ぼす音樂の感動風化の力を謠うて措かず。是れ衆人の共に拒否せざる所。シェークスピヤー嘗て音樂の誘引にかゝる流星に就いて說明すらく、

龍宮仙女の歌の功德に、荒れたる海も浪穩に、天上の星も雖ち來れりき、其音樂を聽かんとて。

散文家も亦音樂に鼓動せられて、其辨才を高む。プラトー曰く、音樂は道德法なり。音樂は物象に靈魂を與へ、心に羽翼を添へ、想像に翅を生せしめ、悲哀には魔力を賦し、凡べての物に光華と活動とを與ふ。音樂は秩序の精髓なり、而して總て善良なるもの、正しきもの、美なるものに向う

て秩序を誘致す。蓋し音樂は此等三者に於ける、目睹すべからずと雖も、而も猶ほ炫耀熾盛にして且つ悠久なる形式其物なればなり。」ルーテルは曰く、「音樂は清純にして且つ煌耀なる神の恩賜なり。予は世界を以てするも之に換へざるべし。」ヘルヴィエ曰く、「音樂は神より吾人に賜はりたる技術なり。之によりて、總ての國民は同一の諧和せる音律を以て、其所禱を一致結合するを得るなり。」カーライル亦曰く、「音樂は、判すべからず測定すべからざる說話の一種にして、吾人を無窮の邊端に導き、且つ吾人をして霎時そを睇視せしむるものなり」と。

吾人をして、更に近代科學の最も深邃たる代表者たるヘルムホルツの言を擧げしめよ。「恰も波浪の奔蕩する海洋の如く、韻律的に一去一來し、而も猶ほ絕えず變化しつゝある此運動や、吾人の注意を緊縛し、亦吾

人を驅りて燥急ならしむ。然れども、海洋に於ては、唯盲目なる物的勢力の活動あるのみ、故に觀覽者の心中に於ける終局の印象は、寂寞の外一も存するなし。之に反して、美術の音樂的事功に於ては、運動の消長は技術者感動の盈虛に隨ふ、即ち感情の自然的表象として、或は切切、或は嘈嘈、或は鶯語の聞關たる如く、或は幽泉の烟ぶが如く、音聲の流漲は清純なる精力を以て、技術者神來の妙技を聽者心靈の奧底に銘刻す。而して彼れ技術者は終に、獨り神の寵兒のみ許容せられたる無窮なる極美の妙境に達することを得るなり。」

ニウマン曰く、「音楷には唯七音あるのみ、縱令之を十四と爲すも、爾く宏大なる企畫に對しては極めて些瑣たる準備と謂ふべきのみ。如何なる科學か能く此些少より此多大を拿來するものぞ。中に存する一種の

大創造者、何ぞそれ其乏しき原素より其新もき世界を創造せる。吾人は斯かる豐富なる心機の創作をば、世上流行の遊戯に等しく、唯意義を缺き、實地の基礎を缺ける技術の妙案巧技たるに過ぎずと謂ふを得べきか。爾く豐富にして而も單純なる、爾く綢繆として而も整齊たる、爾く多種多樣にして而も威儀ある音律の、無窮にして消長なき進化は、果して容易に消え容易に盡くる尋常の音響と同一の觀を爲すを得べきか。此等神秘なる心の聳動激越なる感情何とも知れざる不可思議なる熱望、何地よりともなき畏るべき印象は、果して實に去來し消長し始終する實體なき物によりて拿來せらるべしとするか。決して然らず、亦有り得べきにあらざるなり。否、彼等は高尚なる世界より漏れ來れるのみ、悠久なる調和の、偶、創造せられたる音響の媒介を以て注盛せるのみ、吾人

の故郷なる樂園よりせる反響なるのみ、天使の聲なり、神人の歌謠なり、天の政廳に於ける神人の活ける律法なり。假令死を免かれざる人間なりとするも、吾人の測知し言說し能はざる彼等自體の外の實在なり。之に因りて其儕輩の上に卓立し、乃ち能く之を顯揚するの特權を有す。

詩歌と音樂とは、歌謠に於て融合す。昔時より歌謠は勞苦の好伴侶たりき。舟人の粗野なる棹歌は水上に歌はれ、獵人は丘阜に歌ひ、搾乳婦は搾乳場に歌ふ、耕人は平野に歌ふ。商や工や將た農や、何れの職業何れの生業を問はず、各自各別の音樂を有したるや久し。婚嫁する新婦、勞作に赴く勞力者、最後の永き安息に就く老者、何れも皆恰當適宜なる音樂を有し、其種其數眞に記し盡から堂るなり。

音樂は實に同情の母、宗教の侍婢として記述せられたりき。而して皇

帝チャールス四世のフアリネリに語りけむ如く、啻に耳聽を樂しましむるのみならず、復た心の琴線に觸れしめむことを企圖するにあらずむは、其充分なる効果は決して收むるを得ざるべし。

世には吾人現在の生活を以て、特に無味無趣なりと爲すもの尠からず。果して然るか、予は大に之を疑ふ。然れども若し然りとせば、音樂に對する吾人の必要は、一層緊要なるを覺ゆ。

過去に於て、音樂の人間に對して成せる所斯の如し、將來に於ては則ち更に大なるものを望まむか。

歡ぶべきかな、科學や、美術や、其價値を知らむには或る修練を要し、洵に耳の修練の進むがまゝに、音樂の美を感知することと益大なり。毫も音樂の愛好を有せざる個人若くは人種、時に全くこれ無きにあらざるも、

事なして是れ極めて稀少なり。加之、善良なる音樂は、必しも著しき費用を要するものにあらず。今日に於けるも猶ほ音樂は、唯り富者の奢侈物にあらず、時世の進むに隨うて、其全、貧者の伴侶となり、慰藉となるべきは、確に希望し得べき所なり。

第八章　自然の美

ジョブ

地球と語れ、地球は爾に聞ゆべし。

人類の熱眼より逃がれたる吾人の生活は、諸木中に舌を、綱流中に書籍を、巖石中に教訓を、其他諸物中に善を發見す。

シェークスピヤー

六日目の終りに「神は其作りたる諸物を視き、諸物は甚だ善かりき」と。創世記第一章に曰く、然なり。實に曾に善良なりしのみならず、尚ほ復た善の甚しきものなりしなり。されば猶ほ、吾人の住家なる此美はしき世界を感謝するものゝ如何に少きことよ。

前章に於て予は圖らずも自然の美に說き及ぼしたりき。生活の幸福

描寫せんとせば、勢ひ自ら此愛好すべき世界自體に說き及ぼさゞるを得ず。希臘人は此世界を「コスモス」（美）と呼べり。[illegible]

ハムボルトは「其面白き風景畫」中に曰く、予は信ず、茲に四の新經驗の、到底文章を以て其形狀を彷彿たらしむる能はざるものあり。海洋の初觀、砂漠の初旅行、熔石盪流の觀相及大氷原上の踏步即ち是れなり。予はその各に於て感ず、此珍奇なる物の純粹に自然なるは、猶ほ目慣れたる英國曠野の自然なるが如くなるでとを。而も他の世界に於ては吾人の驚異ずるが如く、爾く怪奇異常なりとを。然れども文章を以て傳へ得べき自然の驚異を說くは、全く言語の方に絕ずる自然の怪奇を說くに比ずれば、一層容易なるべしと思はる。[illegible]

然れども吾人多くは古靈幽鬼の彷徨するが如き自然界を登過

徒行し、徒らに局内盲從の蒙蔽に陷いり、絶えて局外靜觀の明なし。吾人は、眼あれども視ず、耳あれども聽かざるなり。抑、看るは看過するよりも勞多し、而して能く看取し得るは、更に大に尊ぶべきことなり。人間のこの世に於て爲す最大の事功は、或るものを視るにあり、而して其視る所之を明瞭に、睹るにあり」とは、是れラスキンの唱ふる所なり。彼れの目、吾人に比し勝るありとは想はれず、而かも彼れの視る所如何にそれ多きや。[illegible]

視んことを希求する前には、先づ之を看ざるべからず。エマルソン曰く、「注意深き日には、歲月の時々刻々その美を與へ、凡眼の逸する所、爛眼之を睹視す、而して未だ嘗て見得ざる、又決して再び見るべからざる畫圖は、刻々にその眼睛に映じ來るなり。蒼天は時々刻々に變轉し、其陰影

を地下に反映す。」[illegible]

自然を愛好すること、是れ大なる天賦なり。此愛好心にして冷かに又壞らるゝことあるときは、品性の缺損を免かれざるもの殆ど鮮し。予は實に自然を愛せざる人必しも醜惡なりと言はず、又自然を愛する人必しも善良なりと言はざるべし、而も自然は多數の人に對して大なる輔翼なり。コップ孃の言ひけん如く、多くの人は美と呼ばれたる門を潛りて始めて聖殿に入るなり。[illegible]

自然の美妙を解せざるもの、世その人あるは疑を容れず。朝暾夕陽の晃耀たるに於ても、或は平靜或は澎湃たる無邊無際の大洋に於ても、どきに或は狂風に搖擺せられ、又或るときは諸鳥の階々を以て生々たる森林に於ても、氷原に於ても、將た又曲嶺に於ても、此等の雄景壯觀一も

其心を動かす能はざるもの、尚ほ他の看葉を以て言へば、乃ち、[illegible]
の目ひけひ如く、雖天地の光明華麗なるも甚心に觸るゝことなく、又その
の情を動かすことなく、日々の奇勝空しくその眼前を經過するもの、亜
その人あるは疑を容れざるなり。憐れなるべけんや。然れども、斯かる
人は幸に尚甚だ鮮し。人々猶は充分には自然を感賞し得ずとも、漸次に
しか爲さんとしつゝあるなり。[illegible]
初夏は殊更衆人の心を魅す。生活其物も已に榮耀なり。野外は芳香鬱
香、日光、諸鳥の囀々、昆蟲の唧々を以て充さる。牧場は黄金花を以て輝き、
殆ど眼前に百草の暢び百花の蕾を破るを睹得る如き心地す。蜂蝶は喜
んで舞ひ、空氣は薫り工、新しき刈草の香は特に甚し。[illegible]
ヴェルヂの「夏日の粧飾」は最も醇眞に、隨て又最も艶麗に、田野夏日の

絶美の快適を記述せる者なり。曰く、予は暮々たる芳草、蓊然たる綠葉、
將た好調なる天籟中に佇立す。予は日光若くは吹き薫る南風に因りて、
發育する生命を感得し得るが如き心地す。綠波打つ青草、目も遥に繁茂
せる木葉、四邊より小暗く繁りなす欅樹、總て此等のものより予の享受す
る所は僅々なるのみ。諸鳥聲中の一音律は余のものなり。微風の戯ぐ所
影面白く木葉の篠弄せらるゝ所、に余の閑天地あり。百花の嬋妍は晨遊
の目を娛ましむるに餘りあり。這般の悠々閑適に於て、予は少くとも生
氣汪溢の感るものを享受す。其享受は決して充分なる能はず、其閑遊は
決して過久なるを得ざるなり。……心、美に打たるゝ時、これ吾人眞靈の生
くる時なり。されば世の齷齪より日暮を偷むことの多きに從ひ、美界に
悠々し得ることも亦久しかるべきなり。……爾く悠々の時こそ徒消せられ

さるの時といふべけれ、便ち心靈の恍然として其往く所を知らざる時、
でれ美を以て其靈を充す時なればなり。這般の悠々は卽ち吾人の素性
命にして、爾餘は悉く幻影にあらずむば煩累たるに過ぎざるなり。人心
懊惱恐怖なく、美麗に且つ寧靜ならひとと是れ自然の理想なり。予は之
を躬行し能はずとするも、少くとも爾く稽考し得るなり。」

季節の相異と變化とは復た趣味の異るものありて、各其特殊の微妙
なる魔力と興味とを有す。卽ち

年華の少女は光明中に躍り、陰晴中に死に行く。

されど今之を詳述するに迫あらず。

我國の人々は、能く漁獵射獵に於ても、動物界より大なる快樂を享く。鳥
獸を山野に逐ひ魚鰕を河邊に網するは、新鮮なる空氣と自然の運動を

得る所以にして、亦た佳景奇勝を探る好手段なり。されど、純粹なる利己
的見地より考ふるも、動物を殺獲するは最も大なる快樂を得る所以に
あらざるべし。遠からずして、認識せらるべし。人若し他の動物を遇する
とき親愛にして、彼等また怖るゝことなく吾人に近接し、爲に吾人彼等
生育の狀態を瞰視するの快を得たらんには、田舍の逍遙いかに樂しか
らむ。彼等の發生及其歷史、彼等の組織及慣習、彼等の感覺及其智能は、限
りなき興味と窮りなき驚異とを吾人に寄與すべきなり。

動植物生活の豐富は眞に驚くべきなり。何人にもあれ、靜に芳草の上
に坐し四邊を注視する秒時ならば、實に生物の無數と其變化とに驚殺
せらるべし。彼等は各自其特殊なる歷史を有して、各自興味津々たる問
題を提興するなり。

若し爾の心だに正しかりせば、萬物は皆爾が生涯の明鏡たるべく、又神聖なる教訓の書籍たるべし。（トーマス・ア・ケンピス）

博物學研究は、吾人を田舍に誘ひ去り、身を平野中に致す特殊なる利益あり。（ホーム）

美は唯田舍に覓むべきのみならず、都府また如何に美麗なるよ。都府は人生の興味と歴史的聯想とに充てり。（ワルポール）

市民は熱心なる自然の愛好者なりき。而も猶ほ一切の倫動市より入る一書屑壯麗に靜肅に將た森嚴なるものの自然の中にありとは思はれず。

地球はこれよりも一層壯麗なる物を有せず。其感動すべき光景を經々看過するものは心の鈍き人なるべし。市府は今朝衣を以て飾らる。靜肅に

且つ清純なる船舶、高塔、劇場、宮殿は廣地に開かれ、蒼空に聳ゆ。予は江の物凄く烟無き大海中を驅け、溪谷や、叢林や、峰巒や、丘陵や、大陸の輝光之を浸すも爾く壯麗ならざりき。予は決して爾く靜肅なるものを見ず、また感ぜざりき。河は閑に其意の儘に流れ行く。而して人家も亦眠れるが如し。偉大の心靈は今猶ほ靜なり。

ミルトン亦倫動を左の如く記述せり。

過幸の住地よ、爾はあらゆる地上の美を有することと饒なり。

我が街衢の或るものに眞に愛すべし。然れども大市宏都にあることと久しき後ち人は田舍を渴望す。

谿谷の落花、疾風に怒る音調、及いつもの日光、大氣、蒼空、皆悉く彼れに對して樂園を開く。（ケレー）

森にクレーの最初に花を言ふ最も當を得たり。何となれば、吾人宏都

にありて想を田舍に馳するとき、先つ念頭に浮び來るものは花なればなり。

ラスキン曰く、「花卉は常人の慰めの爲に造られしものゝ如し。小兒は之を愛し、靜に柔順に將た滿足せる常人は、花の生長を愛し、贅澤に且つ不秩序なる人は花を蒐集するを樂む。花卉は茅屋の財寶なり。而して熱市繁街に於ては、恰も一片の虹の如く、平和を心に抱ける勞働者の窓前を飾る」と。然れども、花は塵街に於ては、若くは造り庭に於てすら、之を山林田野に於て思ふ儘に生育繁茂し得るものに比すれば、萎縮して生氣なきが如く見ゆ。

殆ど總ての季節に、また總ての處に花あり。春に於ても、夏に於ても、秋に於ても、嚴冬尙ほ且つ此處彼處に花あり。原野にも、森林にも、生墻にも、

海濱にも、潮畔にも、將た千秋の雪を戴く山巓の一角にも花を見ざるなし。而して如何に其種類の驚くべき多樣なるか。

嬰子未だ來らざるに、風く既に美容を春風に輝かす黃水仙。暗色にして而も女神「ジュノー」の眼瞼よりも美に、また女神「ヴィナス」の呼吸よりも香ばしき紫花菫。輝々たる日光の靈澤に浴するを須ゆるして萎死する淡青白き櫻草花、其運命を櫻草花に同じくする貝母、百合花、野ばら、森子花。

シェークスピアー

花は唯人目を娛ましむるのみならず、復た神秘と暗示とに富む。凡て花は凜々しき保護者を須てる蠱惑されし佳人の如く見ゆ。ウォルヴォルス吾人に語るらく、

極めて微々たる花蕊、濃紅の餘る幽邃の思想を子に與へ。

花の色と其形狀の種類とは、また或る目的と說明とを有するなり。

花は愛すべきものなれど、葉はまた自然の美を添ふること一層なり。

我が北地の樹木の大なる花輪を有するは稀なり、七葉樹の如く著しき例外あるは勿論ながら、此等の場合に於けるも猶ほ花の色よきは唯數日のみ、然るに綠葉は數月の間其色衰へず。

凡て樹木はそれ自體に於て書圖なり。節瘤多く、我が英國艦隊の記號にして且つ根源なるコドルウッド宗の紀念として神聖なる堅緻の標本なる、將たプリテーン樹木の帝王なる樫は如何に其貌ち圓錐狀を爲して美しく枝葉の積綠にして巨つ光澤ある其實の甘美なる壯大にして歷史的なるウッドマンスタト宮殿の屋根として堅牢なる栗樹は如何に樽は樹木の女王にして春は蔟で葉は未だ見るべからざるも秋は到れば黃

金色に變ずる刺狀の枝葉を有し、葉を以て葉ぶられたる金々たる枝梢、綠色樣を以て黑白班々たる根幹を有す。楡は節清秋に入れば美しき黃金色に變ずる枝梢を以て蔚然たり。白楊樹は黃ばみたる枝葉微風の動く所に舞ふて颯々の聲を爲し、到處他の樹木を搖がせ、山毛欅は、觀る目こゝろよき灰色の幹を以て粧飾せられ、春に於ては嫩綠を以て、夏に於ては積綠を以て、秋に於ては壯麗なる橙黃色を以て籠落を賜はし、且つ秋日春人の睹るが如く、當に樹自體を覆ふを充分なるのみならず、尙ほ樹下の細草を蔽ふ。除りある枝葉の富を有す。

山毛欅若葉や〳〵しき灰色の幹に負ふ所多しとすれば、夫の枝梢の積綠と根幹の赤色との美しき對照を爲せる松は一層美しく、綠芽の樅と共に冬日森林の溫氣を擁保す。

吾人また矮樹小木を看過すべからず。積綠の枝梢を有する楪、透明にして光澤ある子實と色彩燦斑たる枝葉とは、秋天の森林を照らす「ホンボク」、其他薔薇、「プリ〳〵オニース」、淋たる「ポタ、ゼス、ポ」等、卑小は免かるべからざるも、而も猶ほ各或る絕美と固有の好容を有し、森林は音樂を以て充されたるかの如く、吾人之に對し、滿悅と慰籍との汪溢を感ぜざる能はず。便ち

森林は歌謠と為りて、不善の考を入るゝ餘地なからしむ。（ヲ、ニ、ヲ、ヒ）

總じて、冬日森林の美に乏しきは疑ひなし。而も猶ほ、彼等枝葉を以て裝はるゝときには、見えがてなる、又艶麗なる、枝梢の密飾（まとかざり）、また固有の美特殊の趣味なきにあらず。梢頭時に白雪羅花を以て、皚、久白銀の如く、森林爲に玲瓏たるは、或る神靈の饗宴の準備裝飾とも觀待べきからず。ヤ、ヒ

予はジェフリーと倶に、靈に於て、夜に於て、また夏日と冬日とを、はず、樹下靜息の心は、杳々たる蒼空の示現する人世の深奥に接近するを覺ゆ。唯美、理想、及純粹に於て、のみ見るを得べき精神の優靜は此處に求むることを得、何となれば、綠陰深き閑庭には意馬心猿の奔逸を容さゞればなり。この感を起さゝるを得ず。

熱帶地方に於ける森林の容子は、大に我溫帶地方と異らざるを得ず。キングスレーは、之を無要、煩悶、驚愕、否殆ど恐怖の種と爲せり。幹は枝なくして高く眞直なり、故に森林は露骨にして蔚葱の觀なし。例へばブラジルの森林の如き、樹々は半空に聳え、枝葉は百尺高き處に綠陰をつくる。空中、實に森林の眞性命茲にあり。凡て、が日光に登るが如く見ゆ。卽ち其樹に四足獸蹲り、禽鳥蹲り、匍匐動物蹲る。而して之に攀生する植物の

多種多樣なる、吾人の目慣るゝ所のものゝ比にあらず。[illegible]

多くの野蠻國民は樹木を拜す。然り而して予は確信す、予獨り森林の中に在るとき、若し樹々の予に語るあるあらば、予は驚愕せむよりは先づ喜悅を興味とに充さるなるべし。白晝に於てすら森林には神秘なる或るもの存す、而して夜に於て神秘は愈、多くなりまさる。[illegible]

森林には水泊ちのつゞまり之に伴ふものゝ如し。雲、蒼天に美を添ふるに、水なくば景色は完美ならず。清泉、溪澗、細流、河流、將た湖水は天然に性命を與ふるものなり。而して此等のもの、實に吾人の祖先には活きたる實體として考へられ、氷は曉霧に於て、潤き湖水に於て、細流に於て、深潭に於て、將た渺茫たる大洋に於て美なり、總てその多樣なる形相に於て美なり。氷はよく植物を養ひ、又克く森の平地及白晝燈々の山嶺をも裝ふ。氷

はよく巖石を穿ち、また克く谿谷を擊つ。堅岩は過去の氷擊に擊たれ、[illegible]のなれど、柔潤なる雨水の擊つことは最も多し。[illegible]

氷の人心を清新ならしむる効は、寧ろその地を新鮮にする力に勝る。勞作後、湖畔若くは河邊、若くは又た海濱に息ひ、[illegible]

耳邊には輕妙なる囁き、足下には細々たる激湍（トウレンチ）[illegible]を樂むことは如何に快適なるべきか。[illegible]

凡て英國人は海洋の風景を愛す、吾人は海を第二の家庭として觀る、海邊の空氣といふ語の、補養なる語と同意義になりしほど、海は克く大氣を清新にす、海を想起するだけにても、肢體の血液躍ゆたるを覺ゆ。海が自由宏壯の感動を與ふることと恐らくは天空に勝らむ。マンチェスタ市の哀れなる一婦人は、海邊に來るや先づ、萬人悉く滿足し得る感覺物を見れ

もとて痛く喜べりといひぬ。海邊は常に興趣あり。吾人一度び過去の歴史を有する巖層繁饒なる海草、潮水の來去に任ずる動物、海鳥の奇異なる叫聲、一呼吸毎に得る快感、健康、及氣力、想到ちば吾人の海に負ふ所の極めて多きを知らむ。

加之海は常に變態す。予茲年同好の友と俱に夜日の閑を偷みて、ヴイレジスに遊びき。今試に予をして此一日に於ける窓前眺矚の變態を記せしめよ。予等の坐室は、前面乍ち陷りて海となる小庭に對し、海を隔つる凡そ二哩の處にドーセットシャー海濱の小丘、卽ち燦たる黄砂の冠を戴き、暗碧色の峭壁を以て立つ「金杯山」を看る。

予早起前庭に下り立つや、日は反對の側に昇りつゝありき、曙光は靜なる海を蔽ね來りて室鬲を照せり。輝々朝陽の昇るに隨うて海面宛然

鏡の如く煙き山々は紫の霧に包まれき。朝餐の頃には總ての光彩海より去り、海面到處銀の如く灰色に變はりき。相對したる海濱に深べる平野、森林、石坑、地層と漸々現はれ出づる程に、空は碧になりて處々に片雲あり、而も峭壁なほ陰暗く、遠く隔りたる海角は唯うすれゆく一抹の暗影を看るのみ。時の進むに隨ひ海面碧色に變じ、蔥葱として黑き森、青綠の牧場、黄金色なす對岸の穀田愈鮮明に見分くべく、峭壁奇狀次第に顯はれ、白帆點々たる漁舟亦ほの見え渡る。日は次第に高く昇りつ、對岸の下黄色なる一帶の砂濱を看る。而して海は其色を變じ、恰も地圖を染むるが如し。澂澄淺き處は藍寶石の如く、漠々深き處は濃紫色なり。

久しからずして、風起り雷雨來れり。風は頭上に鳴り、雨は木葉を打つ。對岸雨を避けて走るが如く見え、海は黑く暴れて、唯此處彼處白帆の點

[illegible]を看る。[illegible]

然れども須臾雷雨は止み、雲破れ、頭上の日光は薄の如く輝き、對岸再び顯はれ來る。今見る丘巒は、音に平地と森とに分たるゝのみならず、尚ほ復た日光照映の萬と其陰影とに分畫せらる。空は霽れたり、而して日の西天に傾かんとするや、海面一體天空の蒼々に似て美しく須臾にして復た近きは淡碧色に變ず。蓋雲の漂ひ來るや、日光の漏るゝ處、燦たる碧海を現じ、雲影の蔽ふ處濃紺色の島形を描出し、海面宛然多島海に變じたらんが如し。斜陽漸く其歩を進ひるに隨ひ、前丘再び其貌を變じ、模糊一樣の雲態を看る。先に照らされし處今陰になり、先に陰なりし處今照されて、夕陽に浴す。海は再び一樣に碧瑠璃となり、唯晩風の戰ぐ處漣漪を生ず。而して日の傾くに隨ひ碧色漸く淡らぎゆく。

く。落暉を喰び岸嶺は碧綠漸く褪め、或は白きこと殆ど白堊の如くに見ゆる處あり。日沒の一瞬間岸山落暉に照され、瀑は色褪せて冷なる灰白色となる。今まで勇ましく堪へ居たる前丘、即ち金杯山亦終に消え、暮靄は岸巒、森林、田畝、牧場を蔽ふ。餘す處なし。[illegible]

此等は唯變化の一部分のみ、否一日變化の極めて少部分たるに過ぎず。而して一日も其趣を同うするもの殆ど稀なり。時としては海霧溟濛、又時としては本邪に眠れる海の、絶ちに荒るゝことあり。深く隱地に喰入る海灣の存在は、實に其勢力を證するに餘ありと。[illegible]海は晝に於けるが如く夜に於ても變化す。時としては闇の幕を以て覆はれ、時としては輝々數千萬の星光に照らされ、又時としては其形狀一夜盡一夜に同じからざる月の光に浴す。[illegible]

湖水は海洋に比し壯大ならずと雖、或る點に於ては寧ろ一層愛好すべきものあり。海濱は比較的露骨なり。湖畔は、近く水崖に這ひ來り、又時としては水面にすら垂れ懸る植物を以て饒に裝はるゝもの多し。湖水は時に蔚葱たる島嶼によりて點綴せらるゝもの少からず。湖水は時に綠の牧場を以て縁どられ、時に岸根直に深潭より起る嚴峭に涯ちる。而して湖面には、或は激瀨たる漣漪騰立ち、或は時に地景を倒映す。

「雲中の神弓」即ち虹の奇觀は、また水の爲すところなり。虹は眞に天上の使者なり、而して他物とは全く異りて、よも下界の物にあらざらん樣に見ゆ。

染色せらるる物は多し、而も虹は色彩自體なるが如く見ゆ。

最初は燃ゆるが如き赤色淡きして現り出で、次は橙黃色、又その次の

空は爽快なる黃色、而して清新なる綠色の光其側にあり。次は秋空に雲其間なる純碧色、又その次は暮色蒼茫たるが如き藍色。最後に來る紫色は漸次薄れゆきて終に全く消失るなり。

吾人は思ふ、色の惠福の如何に洪大なるかは吾人未だ充分に之を實驗せざるなり。縱令日光能く吾人をして物を識認せしむと雖も、是は唯陰影と形狀とに依て然るならむ。かく思ふは、强ち不安當ならざるべし。色とは如何なる者なるか之を理會せんことを容易からざるなり。而も吾人美を言ふときに起る觀念中には、自ら禽鳥、蝶、花卉、貝殼、寶石、蒼空、及虹霓等存ずるなり。

人心の構造は此僅なるも最も高尚なる文最も崇高なる眞理の理會を能くするも、而も唯頭腦中の一小機關無かりせば、聲香界は吾人より

全く閉鎖せらるべし。吾人は自然の音響を失却せゞ音樂の微妙、朋友の說話、皆永久の緘默に陷らゞ紙片よりも薄く指の爪より小なる網膜に一切の變化起らば、吾人は總て此美界の壯觀奇景を失はん。卽ち物の千態萬狀、色彩の華美、森林、湖水、丘巒、海、洋、山嶽、晴れたる日夜を問はざる天空の美、此等の奇絕景觀景一も吾人の有にあらざらゞ

山また人類の爲に學校として敎會として造られしが如し。學者の爲には貴重なる文書、其中に充てり、勞作者の爲には單純なる學科として親切に、冥想家の爲には淋しき寂庵として、靜閑に、崇拜者の爲には神聖にして光榮なり。而して此等絕上の大殿堂に於ては巖石其樓門たり、白雲其壁畫たり、流れを右とは其讚美歌たり、白雪は其祭壇たり、星羅の蒼空は其穹窿たり。」

一線で此等の美は一つの溪谷を記述したるテニスンの絕詠中に包含せらる。卽ち中に歌はるゝ者市府、花卉、樹木、河流、及山嶺是なり。

「嵌雲すべきまでなり。鬱蒼すべき迄畫眉は峽間を縫さ、林間にたなびき、緑野に、中に、野に、そして時を經ては、左右何れも其中腹に於ては芝生には百花綱漫と盛開して咲き、溪流の初の岸には嚴堅を穿ちて奔流する溪澗叫び、瀑布に大なる岩に瀑布を以てして、終に海に朝す。谷の背には雲に聳ゆる「ガーガンチュア」山峰ちて朝陽を捉ふ、而も前面山峽開いて廣濶の處、忽ちトロアス及其冠冕なるイリオンの古城を露出す。

吾人面して天上を仰視するとき、誰か碧空の魔力を感せざらむ。又誰れか感は天に朝する如き、

感は光を蓋ふて山を圓柱とする、又屋根の如く懸れる白雲を眺めざら

む。（シェレエ）

然れども、吾人若し情氣滿身何の情思なく、漫に蒼空を仰視するあらば、吾人の吻頭に上るもの果して如何なる現象ぞ。言は言はん雨氣を含むと、又言はむ風模樣なりと、或は又言はん暖氣なりと、群衆の喧々、誰か予に夏雲の奇峰日を扶けて嵯峨たるの形狀を語る者ぞ。誰か南方より迸射し來る細き箭の如くなる光線の、夫の奇峰を擊ち、終に雨脚蒼茫の中に沒知し去るを視しや、又誰か夕陽沒して西風之を吹拂ふこと枯葉の如くなるに當り、暗雲の聚散奮踊するを視しや、總て之を看過せり、雲烟過雁毫も怖ゆるの色なく之を看過せり。若し、或は束の間も留意感賞のことありとせば、そは嗤粗大なる者、或は非常なる者に就てのみ爾り。然れども崇高なる高尚なる品性の發達せらるゝは、自然力の猛烈なる表現中

に存せざるなり。飛電の衝動暴風の旋閃に依らざるなり。（ラスキン）

雲の朝夕なき變態を有せる日中の蒼穹は甚だ愛好すべき、復た人の常に最深の美感を以て眺むる日光あり。斜陽の落暉、黎明の曙光是なり。又地平線上篝火の如く燃ゆる火雲あり。（ラスキン）

晩景の光彩は實に倏忽として褪せ去る。爾も夜色の華麗は如何。

白生ける碧玉を青せる蒼穹よ、衆星を率ゆる宵の明星は、燦々として輝き出

月は微雲點綴の間を以て上り、終に皎潔玉の如き清光を放ち、晴を照して行き渡らぬ處もなし。（ルナン）

吾人夜色の美を言ふは、概ね夜靜にして空晴れ星斗闌干たるの時にあり。爾も自然の暴れは亦如何に宏壯なるよ。陰暗光明の間に電光の閃々たるとき、

[illegible]雷霆巖巖に震ひ、萬嶺悉く震撼する(バイロン)

[illegible]如何に壯嚴なる[illegible]

オフシヤンの語に[illegible]

[illegible]今青嵐風雨を驅りて出づ、暴風怒號の間に聞ゆる彼等の聲は愛すべし、彼等の歌詩は絶世のものにあらず。[illegible]

白雲蒼空は愛好すべきも、上天の美は尋に止らず。天體は常住なる崇高の顯現を呈露す。天體は稍く洪災にもて亘り爾も杳遠より、猶ほ柔なる夏の夜に於ては彼等は我靈魂に響かんが爲め低く垂下するものの如し。(ヂイモンツ)

[illegible]曰く、嚴令宇宙の德に何等の敬意なしとするも、其千萬無量の光明を視、又其行程の變化と若春取逆[illegible]が驚異と崇敬とを以て天を仰

がざるもの殆ど稀なり。[illegible]

誰か地獄の探檢より上り來り、時のなほ少の感覺に同情せざる者

[illegible]彼は曰ふ、[illegible]

[illegible]天の美しき光りは、洞窟の闇を[illegible]より吾人の眼に暗け[illegible]

[illegible]山で我は再び星を視き。[illegible]

夜間、天上の星を瞻視すれば、稍く靜止して動かざるもの[illegible]如し、爾も彼等は人間の背て成し遂げたりしあらゆるものに比し遙に勝りたる速力を以て突進回轉するなり。[illegible]

蒼天の星は、海濱の砂礫と共に常に物の多數を表はす恰好なる比喩に用ゐらる。其數七千五百萬に超え、其多くは各自自身の遊星を有する[illegible]疑なし。而[illegible]是れ決して蒼天の星を盡く[illegible]たるものにあらず。天[illegible]

牀板は唯「燦爛たる黄金の「パテン」を以て飾く鏤めちるいのみならず、復た滅燼したる星の釘鈕を以て飾ちる。是れ蓋し吾人の太陽の如く煌耀たりしもの今は死滅したるものなり。ルクレチウスの語にはれば、夫の太陽も千七百萬年以後は斯くなるべし。此他、尚ほ假令肉眼には見得べきもの少しと雖、其數寧ろ星よりも多かるべき彗星あり、又星雲あり。又大空を廻る無數の小物體あり。時々流星の如く目睹し得べし。

此の如く盛なるは獨り天體の數のみにあらず、其大さと距離とは復た驚くべきものなり。大洋は殆ど無限なる如く深くして且つ廣きこと、實に吾人の想像に及ばざらんとす。而も猶ほ大洋は蒼空に較し得べきか。吾人の地球は木星及土星の大球に比すれば小にして、木土の二球太陽に比するときは復た言ふに足らず。太陽自體、之を太陽系の大さより

見るときは復た殆ど言ふに足らざるなり。シリアス星は太陽より大なること一千倍にして、其遠きこと一百萬倍なりとは嘗て測定せられし所なり。太陽系自體は空間の一方中に運行し、他の世界と世界との間を馳せつゝ、而して其大なること複雜なること已れに齊しき多くの他の組織系統に圍繞せらる。而も斯の如くにして、猶ほ宇宙自體の限界に到達せざるなり。

星の吾人を距る遠き者は、其光り假令一秒時間に十八萬哩を行くも、猶ほ吾人に達せんには數年を費すものありといふ。而して總て此等の星の彼方にも亦衆星の系統あり、之を組織する衆星は一個々々に之を認識する能はず、最も精巧なる望遠鏡と雖も、之を見る唯微細なる雲、若くは星雲の如くなるに過ぎざるなり。科學の吾人に啓現する無限無極

(一は大なる方に無限、一は小なる方に無限)は、遂に人間の想像上に生じたる何物にも超越し、實に快樂と興趣の萬古渾るゝことなき源泉なるのみならず、從た人生の環境なる困難悲痛より吾人を揚げるものゝ如し。所く曰ふは唯微かに眞理を浚のめかせしに過ぎざるなり。

第九章　生活の困苦

吾人は生活上多くの困苦を有す、而して其困苦や多種多樣なり、悲哉某々の悲みは確に實なり、特に吾人自ら已れの身上に拿來するもの是なり、然れども他に唯困苦の幻影に過ぎざるものあり、これ決して少からずとせず、吾人若し大膽に之に對せば、彼等一も實體實存を存せずして、唯吾人自身の病的想像の創造物たることを發見すべく、而して「人は空影を見て煩悶す」でふことは、今猶はダヴィドの時の如く眞なるを知るべし。

實に吾人の困苦の或るものは害惡なり、而も實存する者にあらず、然るに他の困苦は實存す、而も害惡に非ず。